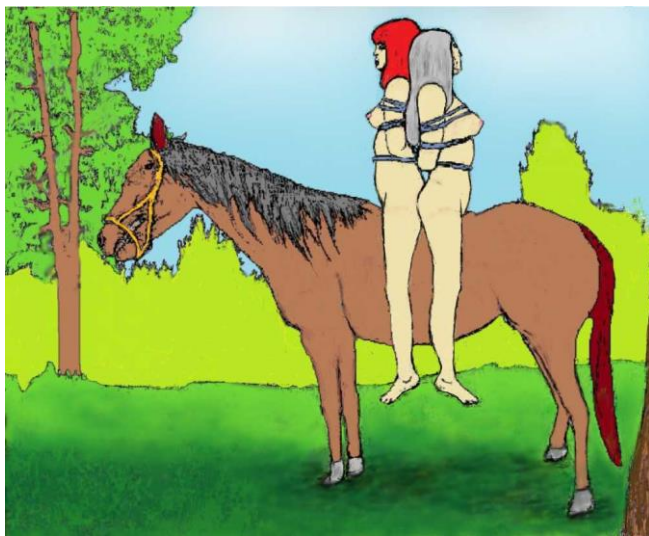


ミスリルの悲劇

～姫姉妹と王妃の三連虐



Presente by 濠門長恭

目次

1. 亡国の母娘	- 3 -
2. 虜囚の屈辱	- 32 -
3. 妹姫の拷問	- 54 -
4. 公邸の略奪	- 76 -
5. 公妃の淫舞	- 91 -
6. 姉姫の肛虐	- 104 -
7. 姉姫の屈服	- 115 -
8. 落胆の真実	
9. 妹姫の破瓜	
10. 野望の調教	
11. 母娘の性務	
12. 白銀の凱旋	

後書き

目次単位で「しおり」を設定しています。

P D F 閲覧の際にご利用ください。

1. 亡国の母娘

着衣の一切を奪われて素裸に剥かれた六人の乙女たちが、二人ずつ背中合わせで裸馬に乗せられていた。互いに相手の腹を抱く形で手首を縛られているので、羞恥の源を隠すことすらできない。乙女たちは羞恥と恐怖に蒼ざめてうつむき、初夏の陽光を浴びているというのに鳥肌を立てている。すすり泣いている者もいる。

いや、ただひとり。先頭の裸馬に前向きに乗せられている真紅の髪の乙女だけは、きっと頭を上げて、黒鎧の騎士団の先頭に行く男を睨みつけていた。馬の歩く上下動にもほとんど揺れない小ぶりの乳房や萌え初めたばかりのような淡い叢には似合わぬ、大の男でさえもたじろぐような瞋恚の瞳で。

真紅の髪の乙女は、その男が槍の穂先に突き立てている真紅の塊にだけは、あえて目を向けようとはしなかった。紅は血の色ではなく髪の色だった。乙女の父君、レナール公ヴィクトルの首級だった。

父親の髪と気質とを譲り受けた乙女、リゼット・レナール。●6歳の最年少にしてミスリル処女騎士団を率いているのは、彼女が第一公女だからではない。二年前の青年剣術大会で4歳も年上の男を負かして優勝の栄冠に輝いた実力と、これは父の薫陶を受けたカリスマ性の故であった。

「……きゃ！」

後ろ向きの乙女がバランスを崩し、リゼットもつられて落馬しかけた。

「む……」

リゼットが膝で馬腹を締めつけて上体を立てなおした。

「も、申しわけりません」

すすり泣きながらも主人に詫びる従者のマリエル。従者は主人よりも年少であるべしという不文律で、彼女は遅生まれの同い年。しかし体格は、ことに女としてのそれは主人をうわまわっている。

「よいのよ。もっと力を抜いて、わたくしに背中をあずけていなさい」

いたわる声にいつものやさしさはなかった。怒ってもいない。ただ平板な、感情の落剥し

た声。父を含む三十余人の虐殺と、その直後に我が身に降りかかった災厄とに、彼女の心はまだ死んでいるのだった。父の仇への憎悪だけを残して。

それでも真紅の髪の乙女、リゼット・レナールは、自分がレナール公国の実質的な後継者たることを自覚して、情勢を分析しようと試みていた。

クローブ国王グスタフ・シュリックと、父の仇は名乗った。東方の砂漠の異教徒と北方の海賊の血とが交わった、凶暴な民族。ここ数十年、じわじわと版図を広げており、いずれ中央世界と衝突することになるうとは、先見の明ある者ならわきまえている。

しかしなぜ、肥沃な平原をまたぎ越えて、小さなレナール公国を侵そうとするのか。神秘の伝説に護られた手ごわい国を。

「あ……」

リゼットの唇から吐息がもれた。

ミスリス処女騎士団とて実戦の諸相を想定して、裸馬に乗る訓練も受けている。しかし、首筋に手をあてがって馬に意思を伝えることもできず、膝も足首も背後の娘と括り合わさ

れていては、馬腹を締めつけることも容易ではない。そしてなにより。剥き出しの股間が馬の背に擦られ突き上げられる、痛いようなくすぐったいような妖しい感触が、リゼットを苛んでいた。

（この行軍の速さだと……）

股間の刺激から意識をそらそうとするリゼット。

まだ陽の高いうちに軍勢は首都城塞に到達するだろう。

前に行く騎士団は五十騎。これだけでもレナール公国全体の騎士より多い。そして後ろに続く歩兵は、ひとつの部隊が五列縦隊で二十段の百人。後ろ向きに乘せられているマリエルの言葉によれば、街道を見とおせるかぎり向こうまで続いているという。

かりに全部で五百人だとすると。首都城塞で抱えている傭兵の二倍半だ。しかもこちらは、あの穂先に掲げられた首級を見れば士気喪失。下手をすると明日の太陽が照らし出すのは、灰燼に帰した首都城塞かもしれなかった。

そのような危機をリゼットは、いやほかの

誰もが、つい数時間前には夢想だにしなかった。レナール公国五百年の歴史はさらに連綿と続くものと、信じる必要すらないほどに自明だったのだ。

——破滅の幕は、レナール公の領内巡視の初日に切って落とされた。

往古の昔に切り拓かれた石畳の街道が貫く森の中。

ぶうううんん……

おびただしい数の矢音が起こったつぎの瞬間。

「ぎゃああっ……！」

「うわわっ……！」

「敵襲、敵襲一っ！」

露払いとして本隊に先行していた三騎のミスリル処女騎士と三人の従者が振り返ったとき、何本もの矢が突き立ったレナール公が無蓋馬車から転げ落ちようとしていた。

がさささっと茂みが揺れて、黒い革鎧と半兜を身に着けた数十名の兵士が街道の両側に姿を現わした。

「見よ！ 矢は貫いた。ミスリル銀、恐れるに足りず。者ども、突っ込め！」

兵士の後ろに立つ黒鉄鎧の男が胴間声を張り上げると。

「突撃いいい！」

「ウラーッ！」

「ウラララ、ウラアーッ！」

すでに半数以上が矢に倒れている隊列に向かって雪崩のごとく襲いかかった。

「父様っ……！」

ようやく状況を理解したリゼットが、長剣を抜いて馬腹を蹴った。従者を置き去りにして、二人の部下も騎士団長に続いた。

しかし。別の伏兵が目の前に飛び出して立ちほだかり、棹立ちになった馬からリゼットは振り落とされた。それでも左手の手綱ははなさず右肘で身体を支えて頭を護ったのはさすがだったが。間髪を入れずに三人の敵兵が組みついてきた。

剣でならいざ知らず、体重と筋力とでは男にかなわない。あっというまにリゼットは取り押さえられ、革紐で後ろ手に縛られてしまった。

六人の乙女たちが黒鉄鎧の男の前に引き立てられたとき、惨劇は終幕を迎えようとして

いた。まだ息のある者も死体も、つぎつぎと茂みの奥へ投げ捨てられ、ただひとつ残された死体は、すでに首を斬られていた。

「公女だけでなく全員を生け捕りとは、でかしたぞ」

胸に双頭の狼の紋章を象嵌した黒鉄鎧の男は、乙女たちを連行した兵には声をかけたが、リゼットには名もたずねない。ミスリル処女騎士団の白染め革鎧と、太く一本に編んだ真紅の髪。肖像画を見たことのない者でも、彼女を見誤ることはない。

「武装解除しろ。平服の女もだ」

男の言葉と同時に、六人の乙女たちに倍以上の兵が群がった。

「貴様、何者だ？ レナール公の隊列と知っての襲撃か？」

つなぎ紐を切って革鎧が剥ぎ取られるのにはさからわず、リゼットは目の前の男を詰問した。

兜と地続きになっているのではないかと思わせる黒髭のなかで、鮭肉色の分厚い唇が斜めに吊り上った。ごつい体軀に似合わぬ優雅な身振りで、貴婦人への礼を執ってみせる。

「それがしはクローブ国王、グスタフ・シュリック。レナール公国を頂戴に参った」

いけしゃあしゃあと放言する。

相手に投げつける言葉を探すいとまもなく。

「やめろ、なにをする！？」

リゼットがうろたえた声をあげて、それまでおとなしく武装解除に応じていた身をもがいた。

ぴりいいいっ……

リゼットに代わってブラウスが悲鳴をあげた。

「ちょっと待て」

グスタフが兵を制したのは、狼藉を止めるためではなかった。

「面白いものを着ているな」

あらわにされたリゼットの胸元を覗き込む。

「胸当てか。これなら女だてらに馬で跳ねまわっても乳房が揺れぬな」

リゼットが着けているのは、へその上までを巻く帯と、帯に縫いつけられ肩紐で固定された半球形の布。現代のコルセットブラの元祖のような下着だった。貴族の子女のあいだではごくふつうに着られている。

「男のなりをしているその下はどうなっているのかな」

異性の服装をするだけで罪に問われ、軽くても広場で公開鞭打ちに処される。だから、処女騎士団とて男装はしていない。穿いているのは、乗馬の妨げにならぬよう二股に分かれたスカートだ。しかしリゼットは反駁しなかった。男が自分を言葉で罵っている、それくらいは男を知らぬ生娘にもわかる。

複雑な飾り結びをほどく手間はかけず、グスタフは短剣を胴回りに差し込んで一気にスカートを切り裂いた。

股間を包む布が男どもの目を引いた。布は下腹部から股間にかけて細くなり、後ろは臀部の大半を覆っている。布の両端には紐が縫いつけられ、脇で結び合わすようになっている。

「ほほう……これまた面白い」

庶民は腰巻が一般的で、貧しい者はそれすらも身に着けない。宗教的に女がスカートの着用を強いられているのは（当の聖職者でさえもきちんと説明できる者は少ないが）脱がさずに性交が可能だからだ。一方では貞淑を

求めておきながら、ずいぶんと矛盾した話のようだが、けがらわしいとされている裸身を晒さない配慮とも考えられる。

リゼットが着けている下着も、男のそれとは違って、穿くのも巻いて結ぶのでもない。結び紐の端を引けば、ただちに股間が露出する。

ご大層に包んでいる、その中身を見てやろうと――短剣の切っ先が腰と紐とのあいだに差し込まれようとして。

「やめろ。女を辱めるのが貴様ら野蛮人のやり方か！」

グスタフが呆気にとられた表情でリゼットの顔を見つめた。おそらくは芝居だろう。

「捕虜を素裸に剥くのは、貴様ら文明人も同様だと思うが？」

「……………」

咄嗟には返す言葉が出てこなかった。

そのとおりなのだ。捕虜から反抗心を奪う意味もあるし、逃げたとしても素裸ではひと目でそれと知れるし、身を隠す場所にも事欠く。

「だが……だが、わたくしは女だ」

「では、戦利品の女奴隷として扱ってほしいのか？」

わずかに切っ先が動いて紐が断ち切れ、股間を包む布が強引に抜き取られた。

「いやあっ……」

リゼットは初めて乙女らしい悲鳴をあげた。しゃがみ込もうとすると、後ろから腋の下に手を突っ込んで立たされた。身をよじろうにも、肩を押さえられていてままならない。

「きゃあ……」

「やめて……」

シルヴィとセリア、二人の部下の悲鳴がリゼットの耳に届いた。マリエルたち三人の従者は悲鳴をあげる気力すらなく、男たちに罵られている。

そうして三人の処女騎士たちは従者と背中合わせに縛られて、裸馬の背に担ぎ上げられたのだった。

軍団は城塞都市に三分の一時間の行程を残して停止した。五十騎の騎士だけが街道にとどまり、歩兵部隊はウマゴヤシの生える畑に散開する。

六人の乙女たちは裸馬から降ろされて、一人ずつ磔に掛けられた。ふつうの十字架ではない。腕を縛りつける横木だけでなく、開脚して固縛するための横木が付け加えられている。

「くそ……どこまで辱めれば気がすむのだ」

歯ぎしりして睨みつけるリゼットを、凶悪に好色の色を交えて見下ろすグスタフ。

「気の強い娘だ。これではゲルトに馭しきれるか危ういな」

リゼットには意味不明の言葉をつぶやいてから。街道に寝かされた磔架の足元にまわり込むと、かすかに濡れている股間を靴の先で軽く蹴った。

「きゃあ……やめろ！」

「わしは、おまえを辱めているつもりはないぞ。世界を手に入れるための手駒として使っているだけだ」

これも、リゼットには理解できない。しかし、その意味を考えている時間はなかった。

グスタフの合図で、六つの磔架がいっせいに立てられた。十人ほどの兵士が基部を支えて、最前線に押し出す。

「くう……」

父の仇への怒りなど消し飛んでしまいそうな羞恥に襲われて、リゼットは呻いた。

「あああ……」

「いやあ、見ないで。見ないでよう……」

「殺せ。ひと思いに殺してくれ！」

乙女たちの悲鳴が初夏の青空に吸い込まれていく。

背丈の三倍ほどの高さに直立させられ、何百人もの兵士に見上げられている。全裸で、しかもほとんど直角まで開脚された、その真下から。

正面部隊にとっては、盾にもなる。首都城塞の兵力は微々たるものだが、三台の投石器がある。狙いは不正確だが、だからこそリゼットたちに当たるのを恐れて射てないだろう。

かまわないから射ってほしいと、リゼットは本心から願った。戦利品の女奴隷とグスタフは言った。そんな境遇に身を墮とされるくらいなら死んでしまいたい。けれど、神は自死をお赦しにならない。ならば、敵の手にかかるよりも味方の手で、勝利への生贄に供されたほうが心安らぐ。

これだけの人数だ。射てば必ず何人かは斃せるはずだ。

(これだけの……？)

ぎょっとして、リゼットは礫にされて身動きできない身体を無理によじり首をねじ曲げて、街道を振り返った。

軍団は、まだ続々と到着しつつあった。黒い革鎧の百人部隊が十個ほども散開したその背後に、もっと粗末な革鎧や、それさえも着けていない農民兵らしき部隊が厚みを加えつつある。三千ではきかない。あるいは五千か。

古来、攻城戦は三倍の戦力で拮抗するという。必勝を期すなら六倍。かりに、残る二つの城塞都市からの援軍が二百ばかり間に合ったとしても、守城側は四百に満たない。六倍どころか十倍以上だ。都市内の住民から壮年男子を掻き集めれば一千人くらいにはなるが、戦闘の訓練を受けていないのだから烏合の衆に過ぎない。それ以前に、彼らに持たせる武器がなかった。

五千もの兵を遠征に動員できるクローブ国の人口とか、兵站を維持できる生産力とかにまでは考えが及ばないものの。中央世界の群

小諸国とは質も量も違うことだけは感じ取れて、リゼットは戦慄した。

やがて。ふたたび黒い革鎧と騎馬の一群に護られた荷馬車が陸続と姿を現わして、それで敵の全軍がそろったようだった。

その一群の中から、子供の背丈ほどはあろうかという巨大な丸太が、街道の最前線に引き出されてきた。丸太は前後を頑丈な台車に鉄帯で固定され、先端には牡山羊の頭を模した鋳物が嵌められている。

破城槌。せいぜいが百人規模の兵隊同士で領地の境界を争うのを戦争という今の世に、こんな大時代な兵器を使うなど、歴戦の傭兵隊長でさえ思いつかないだろう。

その破城槌を先頭に、左右に六本の礮架を押し立てて、侵攻軍がゆっくりと前進を開始した。

「いよいよ、やるんだな」

「そんなこたあ、国を出るときからわかりきってたじゃねえか」

「いんや。レナール公を倒す前なら引き返せたんだ」

「それだがよ。領地視察に投石器を持ってく

馬鹿がないのと同じで、ミスリル銀の武具は、なかったんだろ？」

「羽根のように軽く、鉄も紙のように切り裂くという……」

「そんなのが百人も出てくりゃ、俺たちは全滅だわな」

「私語は慎め！」

百人隊長が叱咤する。

「貴様ら、クローブ王国直属の軍人でありながら、国王陛下のご英断を批判するのか」

そういうことだったのか。

屈辱のどん底にのたうちながらもリゼットは、伝説の幻影に怯えるグスタフをあざ笑った。ミスリル銀の武器など、地上には存在しないのだ。

中央社会では唯一の女性騎士団にミスリルの名を冠し、神秘の武具の存在を否定も肯定もせず、外交を有利に進めてきたのは事実だが。しかし、このような圧倒的な大軍の前にはまやかしが通じるはずもない。

リゼットが予想したとおりに、軍勢は一矢も浴びることなく城壁を取り囲んだ。城塞都市は門という門を固く閉ざし、一兵の姿すら

見えない。公女殿下のあられもないお姿を見る不敬は冒せないということかもしれない。

護衛兵に囲まれたグスタフが、リゼットの磔架を背に大音声を張り上げた。

「レナール公妃ならびに領民に告げる」

レナール公の首級を突き刺した槍を天高く掲げて。

「すでに領主は討ち取った。第一公女も見てのとおり」

ただちに城門を開いて降伏せよ。今ならば、レナール公の財産没収と家族の投獄だけで穏便に取り計らってやる。庶民の生命と身分と財産は安堵する。しかし、ひとたび破城槌が城門に打ち当てられたのちは、男どもは皆殺し、女子供は奴隸として売り飛ばす。

「降伏するならば城門を開き、公妃オリティアならびに第二公女ミリアムは、ただふたりで我が前に身を屈めよ」

我を射て——口をついて出そうになる言葉を、リゼットは無理に呑みこんだ。

たとえ敵が神秘の幻影に怯えていても、これだけの圧倒的な差があれば結果は明白だ。だいいち、敵兵が羊の群れだとしても敵将は

獅子だ。それにひきかえ、味方には羊の大將すらいないのだ。

自分と母と妹とが犠牲になっても領民を護る。それが支配者の義務というものではないだろうか。

グスタフは、リゼットの磔架が落とす影の横に槍の石突で線を引いた。影がそこに達したときが、攻撃開始なのだろう。

城塞は静まり返ったまま。五千の兵も、結果や如何にと固唾を吞んで、のどかな田園に緊張が高まってゆく。

じりじりと影が動いて、その端が地面の線に届いた。

「全軍、戦闘態勢！」

黒い革鎧の軍団は、さすがに機敏だった。二十五列四段に隊列を組んだ最前列の兵が槍を水平に構え、二段目三段目は斜めに立て、四段目は垂直のまま。属領から動員したのか急遽徴募したのかまではリゼットにわからないし興味もないが、残る雑兵は緩慢な動きで精鋭部隊の後ろに散開した。

「破城槌、進め！！」

鑄物の頭を嵌めた巨大な丸太が四十人の屈

強な兵士たちに押されてゆっくりと前進を始めた。ゴロゴロと地響きを立てながらすこしずつ加速していく。

しかし、人の歩く速さの半分にも達したとき。

ギイイイイイイ……重い音を響かせながら、破城槌よりも遅い動きで大門が開き始めた。

「破城槌、停止。戦闘態勢、そのまま」

大門が開き切るはるか前に、二つの人影がその隙間から歩み出た。正装をするいとまもなく駆けつけた、公妃と第二公女だった。

公妃オリティアは毅然と頭を立て、ゆっくりとクローブ国王の前に歩み寄った。よほど急いで城門に駆けつけたのだろう。結い上げた金髪が崩れている。それはしかし、彼女の美貌と貴賓をすこしも貶めていなかった。

まだ●3歳の第二公女ミリアムは、今にも泣きだしそうな表情で、母の背に隠れている。お下げに編んで両側に垂らした金髪。ひ弱な印象を受けるが、実は三年前の姉の肖像画にそっくりなのだ。姉妹そろって、容貌は母親ゆずりだった。

オリティアがスカートの裾を軽くつまんで

片足を引きながら膝を屈して、文字どおりに地面につけた。だけでなく、上体を深々と折り曲げて頭を垂れた。もっとも自分を卑下する作法である。軽く膝を曲げただけのミリアムも、あわてて母を真似る。

「レナール公国を代表して、恭順の意志を表します。国民には寛大な処置を賜りますようお願い申し上げます」

自分たちの助命は口にしなかった。すでに覚悟はできていると、その悲壮な表情は語っている。しかし、リゼットと同じように、いやそれ以上に辱められる覚悟まではできていたかどうか。

「こやつらも捕虜だ。武装解除しろ」

ひざまずく二人に六人の兵士が群がった。引き立てて、無雑作に着衣を破り取っていく。

「きゃああ……やめて、やめて！」

「騒ぐのはおよしなさい。姉様の姿をごらんなさい。黙って耐えておいででしょう？」

娘を諭す母だったが。首と手足に鉄環を嵌められ、手は後ろにねじあげられて二つの鉄環をボルトでつなぎ合わされるときは、さすがに抵抗のそぶりを見せた。

「妹のほうは女親の血が濃いな。透きとおるような金髪で、男好きのする身体をしている」

ミリアムは三つ年下だが、胸の膨らみは姉と同じくらいの大きさだった。ただ、泉の叢はまだ萌え出でてない。下だけが父親に似るということは、まさかあるまいな。グスタフが卑猥な冗談を口にして、兵士たちの追従笑いを誘った。

リゼットも磔から下ろされて、二人と同じ姿に拘束された。三人は首環に鎖をとおされて、年の順につながれた。

残る五人の乙女たちも磔から解放された。彼女たちは鉄環こそ嵌められなかったものの、全裸のまま後ろ手に縛され首に縄を掛けられて、街道の後方へ連れ去られた。

「あの者たちを釈放してください。投獄はわらわどもだけと約束してくださったではありませんか」

「武器を持ってわしらに向かってきたのだ。無罪放免というわけにもいくまい」

彼女たちは無辜の民ではない。捕虜だ。釈放するのは身代金と引き換えだと、グスタフは言った。むしろそれで、オリティアもリゼ

ットも、ひと安心した。処女騎士団員は貴族の子弟だ。従者ともども、親が言い値で買い取ってくれるだろう。

家来の心配をしている場合ではないのだぞ——と、グスタフは三人をつないだ鎖の端をみずからの手に握った。

「我はこれより近衛騎団と直属歩兵を率いて入城する。残る部隊は野営準備。近隣の村から物資を調達するときは、必ず代価を支払え」

これで文句はなかろうとばかりに、オリティアを見返ってから。重い鎧をものともせず一挙動で馬に乗った。

「入城部隊、前へ」

さすがに跳ね返り者の狙撃を恐れてか、護衛の騎士にまわりを囲ませて、グスタフが馬を進める。ふつうに歩くよりは五割がた速い行軍歩調に、母娘も鎖に引きずられて歩く。馬に乗せられるとき裸足にされていたリゼットは、石畳の割れ目に何度もつま先をぶつけて、両方の親指に血をにじませた。

街の中の家という家は鎧窓を閉ざしていた。侵略者を恐れてということもあろうが、やはり王妃王女の裸を見るに忍びないのだろう。

覗き見をする人影も見え隠れしているのだが、それに気づくゆとりなど母娘にはない。しかしグスタフは何度か気づいたらしく、そのたびに髭面の下で薄く嗤った。旧支配者の権威を地に墜とせば、それだけおのれの権威が高まる。

レナール公邸は宮殿のような公的色彩は薄く、立派なお屋敷という程度だ。それでも三階建てで、一階には大広間もあれば謁見室もあり、兵士の詰所、貴族たちの控室、奥まった箇所には台所が三つもあり、使用人たちの居室もある。その入り組んだ通路を、ここでは先頭に立ったグスタフは迷うことなく裏庭に突き抜けた。

数名の腹心だけを連れてグスタフは、裏庭の奥に広がる林に踏み込んだ。

すぐに開けた場所に出た。といっても、背の高い雑草におおわれてはいたのだが。その広場の中央に突き立った四層の塔。

「ここを、どうして……？」

オリティアが不審の目で男の後ろ姿を眺めた。

正義の鉄槌の塔。身分ある重罪犯、たいて

いは政敵を幽閉するのに使われていた牢獄である。ヴィクトールの治世になってからは使われたことがなく、ほとんど忘れられた存在になっていた。グスタフは、それを本来の目的に使う意図らしい。

廃屋に特有の乾いた黴臭いにおいに満ちた塔の中。ほとんど梯子のような急勾配の階段を、母娘は三階まで追い上げられた。後ろ手に拘束されているので手すりにもつかまれず、何度も足を踏み外して転げ落ちそうになったが、首の鎖に引き止められて転落だけはまぬがれた。そのかわり三階にたどりついたときには首にいくつも擦り傷ができていた。

三階は中央部が円形の空間になっていて、周囲は鉄格子を巡らせた三つの檻に仕切られていた。階段口のそばにある直角の部分だけは鉄格子もなく、粗末な机と椅子が埃をかぶっている。そこが牢番の居場所だろう。尋問のときには記録係が座るのかもしれない。

母娘は中央の檻に、まとめて監禁された。

グスタフの部下が鉄格子に三本の鎖を絡めて、その端にひとりずつの首環をつないだ。それで三人が別々に動けるようになったが、

鎖が短いので壁にもたれかかることもできなかった。

「今日はなにかと忙しい。尋問は明日にする」
グスタフは母娘を置き去りにして、部下ともども引き揚げていった。

すでに夕暮れが濃く、高い位置にある小さな窓から残照が尾を引いているが、檻の中は薄暗い。気温も急に下がって、素裸では涼しいというより肌寒くなってきた。しかし十年以上も使われていない牢獄には、毛布はおろか寝藁さえもなかった。

鉄環で後ろ手に拘束されたままなので、身を寄せて抱き合うこともできない。いつしか母娘は斜めに向かい合って座り、投げ出した脚をほかの二人の脚に絡ませるという、他人どころか自分にさえも見せられないような、あられもない姿勢で上体を寄せ合っていた。

「おなががすいたわ」

ミリアムがつぶやいた。どうしてもなにかを食べたいという、駄々をこねる口調ではない。ぽつんと物悲しいつぶやきだった。

「忙しくて、母様たちのことを忘れているのでしょう。明日になれば、きっと思い出して

くれますよ」

オリティアが娘を慰める。

思い出して食事を与えてくれるだけではない。尋問とグスタフは言っていた。ただ監禁するというだけで、これだけの虐待だ。なにをたずねるにしても、もっとひどい仕打ち、拷問まがいのことまでされるかもしれないと――それはオリティアもリゼットも予想はしているが、わざわざ言葉にはしなかった。

「こんな大軍勢を動かして。たかが三万五千人から四万人の小さな領地を掠め取るなんて、あの蛮族はどういうつもりなのでしょう」

拷問への予感を忘れようと、リゼットはかねての疑問を口にした。

「まあ、リジ。あなた、わからないの？」

「え……？」

母の肩にあずけていた顎を引いて、リゼットは上体を起こした。

「この国には、有ると思われていて無いものと、無いと思われていて有るものとがあるのよ」

「あ……！」

謎かけの前半は、すぐに解けた。ミスリル

銀だ。非力な女性にも楽々と着こなせる軽くて強靱な鎧と、鉄鎧をも切り裂く鋭利な剣。その伝説ゆえにレナール公国は領地を侵されることもなく平和を享受してきた。

しかしクローブ国のように領土欲に猛る国は、侵略のための武器としてミスリル銀を欲しがるのではないか。あるいは、敵国がミスリル銀を入手するのを恐れるのではないか。

レナール公国に生まれ育ってきたリゼットには、ミスリル銀の伝説にも慣れ親しんできて、その危険に気づかなかった面がある。ミスリル銀の探求は知的好奇心の対象ではなく征服欲の器なのだ。

「でも、無いけれど有るものって……？」

「母様は嫁いできた次の日に、寝室への道がわからなくなりました」

母がなにを言うのかと、リゼットは息を忘れてその口元を見つめた。

「この屋敷の間取りを覚えるまで二週間はかかりました。それなのにあの男は、迷うことなく屋敷を歩きまわり、この塔の存在さえ知っていました」

前もって間諜をはなち、念入りに探ってい

たに違いない。もちろん、それくらいでミスリル銀の秘密があばかれるはずもないが。それだけ明確な目的と意志とを持ってレナール公国侵略が企まれたのだ。

リゼットは、質問をはぐらかされたことに気づいた。が、謎かけへの興味は薄れていた。

「明日からの尋問とやらは、さぞ厳しいものになることでしょう」

「わたし、怖い……」

言葉の裏に隠された意味を悟ったのか、ミリアムが泣きべそをかいた。

「だいじょうぶよ。ミリもリジもなにも知らないのだから。知らない者に尋問をするほど、あの男も馬鹿ではないでしょう」

我が身を犠牲にしてでも二人の愛娘は守り抜くと――オリティアは覚悟を決めていた。

リゼットは無言だったが、いざとなれば剣技で鍛えたこの身体に責めを受けてでも母と妹を庇うと――ひそかに心を固めていた。自分こそが拷問にかけられるべきなのだ。未来の夫、つまり次期レナール公に、この国の歴史を、レナール公列伝の大筋を教えるために、父の黙認を得て列伝を読みふけり、ついにミ

スリル銀の謎を解明した自分こそが。苛酷な拷問の末に責め殺されて、あの錬金術師とは違って永遠に謎を封印する。これが自分の高貴な責務なのだと、リゼットはひそかに考えている。

しかしそれぞれの健気な決心は、凶暴にして狡猾なグスタフ・シュリックの前には無力だったと、すぐに思い知らされる母娘なのだった。

2. 虜囚の屈辱

母娘は、ほとんど一睡もできなかった。一日の大半を馬の上で、それも最後の強行軍は縛られて裸馬に乗せられていたリゼットは、疲れから眠りに惹き込まれるのだが、槍の穂先に突き刺さった父の首級が夢の中に出てきて、そのたびに泣き叫びながら目を覚ますことの繰り返しだった。

「父様が、父様が……」

ついにリゼットは、騎士の矜持などかなぐり捨てて、多感な乙女には耐えられない恐怖に嗚咽したのだった。ミリアムは、わけもわからずにもらい泣きした。

こういうときには言葉の慰めなど役に立たない。そっと抱きしめてやるのが一番だ。それなのに、オリティアの腕は背中にねじ上げられたままなのだった。

そうして母娘は、虜囚として最初の夜明けを迎えたのだった。

陽が梢の上に姿を現わさないうちに、塔の外に人の気配が近づいてきた。ガチャガチャ

と音を立てて、誰かが登ってくる。

鎧下をだらしなく着付けたクローブ国の兵士が二人と、貴族の衣装に身を包んだ肥満体の小男が一人。

「朝ごはんですぞ」

鉄格子を開けて、兵士が床の上に三枚の食器をならべた。そこに、少量の野菜屑が浮かぶだけのスープが注がれた。火をとおしていない干し肉と干からびたパンが、家畜に餌を与えるかのように無雑作に放られた。

「お姫様たちの口にゃ合わねえだろうが、スープが温かいだけ野戦食よりゃ贅沢なんだぜ」

小男が、携えていた道具箱から先端が平行に開いた工具を取り出し、それを使って三人の手枷をはずした。しかし、スプーンやフォークまでは与えてくれない。

スープからは、なんともいえない異臭が漂ってくる。いくら兵隊の食事よりはましだと言われても、空腹にさいなまれていても、口に入れるのがためらわれた。

「こやつらは、やんごとなきお姫様方への給仕が終わるまで、朝飯にありつけませぬ。さ

っさとお食事をすませていただきたいですな」

母娘は擦り傷だらけの手首をさすりながら、食事には手を出そうとしなかった。

「こんなもの、食べられないわよ」

最初に宣言したのはミリアムだった。育ち盛りなだけに、空腹にはもっとも弱いはずだ。しかし痩せ我慢ではなく本気らしかった。絶食で体力が落ちたらどうなるかまでは考えていないのだろう。

「食べないんなら、俺っちが食べちゃうぜ」

兵士のひとりが、冗談半分脅し半分に言う。言うだけでなく膝をついて、床のパンに手を伸ばす真似をした。

「どうぞ、お好きなように。床に落ちた物をたべるなんて下品な振る舞いは、わたしにはできません」

兵士は小男を振り返った。小男がうなずくと、すかさずパンを拾って口に放り込む。

「それじゃ、おいらは肉をいただくぞ」

「スープは半分こだぜ」

あっという間にミリアムの取り分は消え失せた。

「お母様とお姉様は、どうなさいますかな？」

ふたりは無言で両側からミリアムを抱きしめた。これ以上明白な意思表示はない。

「よかろう。これは持ち帰って、おまえたちの好きにしてよろしい」

搔っ払うという形容がぴったりの仕種で、兵士たちはパンと干し肉を籠に入れ、スープを小さな桶に戻した。

小男が再び工具を取り出して、兵士にミリアムの腕をねじ上げさせた。

「待ってちょうだい」

ミリアムが高飛車な口調を捨てて訴えた。

「おや、食べる気になりましたかな？」

「誰が、そんな汚らしいものを。そうではなくて、すこしの間でいいから、お外へ出してほしいの」

「逃げられませんぞ。階段の上り下りで、また首を吊られたいのですか？」

「そうじゃなくて……」

ミリアムが口ごもる。

「そうじゃなくて……お花を……お花を摘みたいのよ」

「おめえ、自分の立場をわかってんのか？」

兵士のひとりが呆れた口調でミリアムを見おろした。

「おままごとなんざしてる場合じゃねえんだぞ」

「わかつとらんのは、おまえだ。やんごとなきお姫様はな、お花を摘みながらお花に肥料を施すのだ」

「はあ……？」

小男の言葉にぽかんとする兵士だったが。ようやく思い当って。

「ああ、そういうことですかい。おしっこですか、うんちですか？」

たずねるのではなく、からかっている。

「わたしは、わたしは……」

ミリアムは顔をまっ赤に染めて絶句する。そのあいだに、ミリアムはふたたび後ろ手に拘束されていた。

「さいわい、この下は薬草畑になっていましたな」

小男は壁に歩み寄って、掛け金の下りている扉を開けた。腰の高さにある扉の向こうは出窓のように張り出していて、しかし窓はなかった。そのかわり、下に大きな穴が明いて

いた。

「お花は、ここで摘んでいただきましょう」

その言葉と座面の穴とが意味するところを理解して。ミリアムはますます羞恥に顔だけでなく全身を染めた。

彼女が立ち尽くしているうちに姉と母の鉄環も、それぞれボルトでつなぎ合わされた。そのかわり、出窓に届くようにと、首の鎖が鉄格子からほどかれた。

「おまえたちは先に帰ってもいいぞ。如何にそれがしとて、手枷の女に制圧されるほど軟弱ではないでな」

兵士たちは小男の言葉に従わなかった。

「やんごとなきお姫様のおしっこやうんちなら、金を払ってでも見物してえや」

「こんなこと、うちの嬢にでも頼もうもんなら、張り倒されるもんな」

わたくしだったら、金玉を蹴り潰してあげるわと——内心で罵るリゼットだった。

男たちに見物されていては、どれほど生理的欲求が切迫していても、我慢するしかない。しかし。飲まず食わずとはいえ、三人とも昨日の午後からずっと機会を与えられていない

のだ。ことにミリアムは、堤防の決壊が目前に迫っていた。

それを母親の勘で悟って、オリティアが動いた。出窓に向かい合って立ち、上にしゃがんで部屋の中にまで飛び散ると判断すると、ためらうことなく男たちに正面を向いて出窓に腰掛けた。

「お母様、そんなはしたない……」

「これは神様がお定めになった人間の摂理なのです。恥じらうことはありません」

と宣言はしたものの。羞恥のきわみに気も遠くなりかけて、すぐにできることではなかった。目を閉じて男たちを視界から締め出し、何度も深呼吸を繰り返して全身の力を抜いて。やっとの思いで、みずから堤防を切り崩した。

ぷしゃあああ……

半日以上も溜めていただけあって、凄まじい勢いで長々と大量に放出した。

それだけでなく。

「くうう……」

顔をまっ赤にしていきむと。

ぼとっぼととっ……

固形物まで薬草畑に施肥をした。

「こりゃあすげえ。全軍布告ってやつだぜ」

「貴様、我らの恥を言いふらすつもりか！？」

軍隊用語に心得のあるリゼットが、言った兵士に肩から突っ掛った。

ガチャン！

男の身体が吹っ飛ばされて鉄格子にぶつかった。が、抜け目なくリゼットの裸身を抱きすくめている。

「痛ってえ……女騎士様はこええなあ」

言葉とは裏腹に、羽交い絞めにしたリゼットの乳房を掌で揉み始めた。

力まかせにこねくられて、リゼットは息を詰まらせた。剣術の稽古で誤って胸を打たれたときの激痛とは違って、汚辱が肌に沁み込むような痛みを感じられた。

「……なにをやる。手をはなせ！」

身をよじろうにも、乳房の痛みが先に立って身動きできない。

「自分から男の胸に飛び込んどいて、そりゃねえよなあ」

からかいの言葉とともに、男の掌は乳房からはなれた。が、下腹部をまさぐられて、リゼットの背筋を悪寒が突き抜けた。

「やめ……やめてくれ。お願いだから」

ピシッと鋭い音が鳴って。リゼットは圧迫から解放されて床にへたり込んだ。

「女に触れるなと厳命してあるだろうが。この痴れ者め」

救いの主は、意外なことに小男だった。

「レナール公と同じ目に遭いたいのか」

「そ、そんな……どうかお目こぼしを願いやす」

鞭で叩かれた手の甲をさすりながら平身低頭する兵士。

そんな幕間劇のあいだ。花を摘み終えたオリティアは、便座に腰掛けたまま途方にくれていた。

「お慈悲ですから……ほんのひと呼吸のあいだだけでもいいです。手を自由にさせていただきませんか」

向きなおった小男に、卑屈な口調で願いを述べるオリティア。

「なに、麗しきお手を穢すことはありませんぞ。おい、天水桶を持ってこい」

点数稼ぎとばかりに、役得にあずかった兵士が梯子を駆け上った。ほどなくして、赤ん

坊を沐浴させられるほどの大きな桶を提げて下りてきた。

「おまえたちでは失礼な真似をしでかすかもしれないから」

それがしが始末をしてさしあげましょうと——小男か道具箱から、今度は長い柄のついた刷毛を取り出した。天水桶で刷毛をたっぷり湿らせると、それをオリティアの尻の谷間に押し当てた。

「い、痛い……」

本来はなにに使うのか、その刷毛は塗料を塗る道具にしては固すぎた。それで、ごりごりと尻の谷間をこすっては、天水桶ですすぐ。「こんなものですか。前のほうは……ま、汚れるようなお召し物は身に着けていらっしゃらないのですから」

いちいち拭く手間をかけることもないと、小男はうそぶいた。

オリティアが便座から立ち上がると、ミリアムが大急ぎで座った。母のように羞恥に悶えるゆとりもなく、盛大に放尿を始めた。終わるとすぐに立ち上がった。蟹股になった腿の内側を滴りがつたつた。

リゼットは妹ほど切迫していなかったが、この機会を逃すとつぎはいつになるかわからないので、しぶしぶといった態で薬草に肥料を施した。母にだけつらい思いはさせたくないとはばかりに、盛大な音を響かせて固形物も落とした。そして、肛門を挟られる痛みには無言で耐えた。騎士団長でもある自分は母よりも強くあらねばならないと、かねてより思い定めているのだった。

小男は兵士を率いていったんは去ったのだが、一時間としないうちに戻ってきた。今度は五人の職人らしき一団を従えている。

小男の指図で、牢獄の中は見る見るうちに模様替えされていった。円形の広間になっている中央部には、天井にいくつもの滑車が吊るされた。壁には疑問符の形をした太い環が捻じ込まれて、母娘の鎖をつなぐ場所は鉄格子の前とは限らなくなった。

梯子が持ち込まれて水平の台に固定され、一端には鉄枷が、一端には二輪車のような輪が作り付けられた。おまえたちの足を固定して、手首に巻いた縄を巻き取っていくのだと、

小男が母娘を脅した。

ずっと大きな輪が、これはひとつだけ宙に浮かせて垂直に立てられ、その下に細長い飼葉桶が据えられた。被拷問者を縛りつけて車を回す。細長い桶にはたつぷりと水を張っておくのだと言われても、泳ぐ習慣がなく溺れかけた経験もない母娘には、その残酷さが理解できなかった。

塔の外で正三角形に削られた太い木材も四本の脚で、滑車の真下に水平に据えられた。木馬だと言われただけで、すくなくともリゼットはその使い道をすぐに悟って戦慄した。

自分の身体で味わうことになるだろうさと、使い方を説明されなかった器具もあった。そのひとつは、四角い踏み台の上に突き出た円板だった。パン皿ほどの円板は中心を木の軸で支えられて膝の高さほどのところにある。円盤の縁から、四角い鉄棒がさらに上へ伸びていた。この円板を回すのだろうか、踏み台には紡ぎ車のようなハンドルも取り付けられている。

説明の必要もない、おぞましい道具も持ち込まれた。火桶と焼き鏝、穴が三つあるいは

五つと明いた大きな木枷、そして長短さまざ
まな鞭。

ただ監禁だけを目的として作られていた牢
獄は、わずか半日のうちに恐怖の拷問部屋に
変貌を遂げたのだった。

拷問器具ではない調度も持ち込まれた。

母娘が閉じ込められている隣の檻には三人
でも広すぎるほどの寝台が据えられた。そし
て長椅子。これは牢番の机と椅子が取り払わ
れて、そこに置かれた。

その二つを怪しんだのはオリティアただひ
とりだったが。寝台が置かれた檻の鉄格子が
縦長に切り取られて、そこに銀メッキの金属
板を磨きあげた大きな姿見が嵌められたとき
には、ミリアムまでが首をかしげた。

そしてもうひとつ。金メッキを施された、
リゼットとミリアムが手をつなげばどうにか
囲めるほどに大きな、喇叭のような笠。深く
湾曲させた三角形の板をつなぎ合わせてある
それは、母娘が監禁されている檻の天井に穴
を穿って金属の管で吊るされた。明かりの反
射板にだろうとリゼットは考えたが、手配が
間に合わなかったのか、肝心のランプも燭台

も、その下に置かれなかった。

仕事を終えた職人たちと入れ替わるようにグスタフが供も連れずに鉄格子の前に立った。

「ミスリル銀の武具は、どこに隠してある？」

開口一番、彼は単刀直入に問うた。

「武器蔵、宝物庫、馬小屋、寝室、客間、大広間の飾り鎧、物置小屋——宮殿内のあらゆる箇所はもちろん、城外の修道院も、あと二つの街も、領内すべての村も探した。よほど巧妙に隠してあるようだな？」

「ミスリル銀など存在しないのです」

裸身を鉄枷で拘束されて鎖につながれたオリティアは、むしろ憐れむような表情で夫の仇を見上げた。

「三百五十年の昔、錬金術師アルキポスはミスリル銀を発見しました。しかし彼は、それを大量に精錬する技を完成できませんでした。そしてわずかに錬金されたミスリル銀も、その方法も、彼の死とともに失われたのです」

オリティアは記憶の糸をたどるようにゆっくりと、しかし淀みなく言いきった。

なぜかりゼットの顔に驚愕が浮かんだ。それは一瞬のことだったので、グスタフもオリ

ティアも気づかなかったようだが。

グスタフは鉄格子の前からはなれて、壁に掛けてある鞭の一本を手を取った。

バシン！

九本の革紐を束ねてそれぞれの先端に棘を植え込まれた鞭が、床に叩きつけられて凄まじい音を発した。煉瓦を敷き詰めた床から細かな破片が飛び散った。それは拷問ではなく処刑に使われる鞭だった。そんな凶悪な道具まで、この男は用意させていた。

「わしはこれまで、欲して手に入れなかったものはない。国であろうと女であろうとな。だからこのたびも、ミスリル銀は必ず手に入るのだ。ひと晩だけ、考える猶予を与えてやる。明日からは、隠し場所を白状するまで、やわな中央世界では思いもつかぬような凄まじい拷問に掛けてやるぞ」

「どんなに責められようとも、無い物のありかは白状できません」

グスタフは鼻から盛大に息を噴き出した。それが、彼なりの嘲笑かもしれなかった。

「ここに取り揃えた拷問道具を見ながら、じっくりと考えることだな」

グスタフは鞭を壁掛けに戻すと、母娘に背を向けた。そして、階段を下りかけて振り返る。

「今朝は飯を食わなかったそうだな。今夜と明日は、しっかり食っておけ。体力をつけておかんと、わしの拷問には一日たりと持ちこたえられんぞ」

言い捨ててグスタフは階下に消えた。が、小男は居残ったまま。

「そういえば、まだ自己紹介をしておりませなんだな。それがしは、ニコラ・ベリエ。クローブ国の宮廷付錬金術師でございます」

肥満体の小男は、クローブ国の習俗に反して髭のない顎をつるりと撫でた。一見して愛嬌のある顔をしているが、よく見れば残忍のかぎろいが唇の端やまなじりに滲んでいる。そして、オリティアの豊かな肉置きに目を向けるときには、見紛いようなない好色が表情に浮かんでいる。

夫にしか肌を許したことがなくともじゅうぶんに開発されているオリティアには、それがはっきりとわかる。いずれ、自分はこの小男に犯されるのではないか。貞淑な公妃は、

おぞましい予感に戦慄した。

グスタフが去って四分の一時間経つか経たないうちに、今朝とは別の二人組が夕食を運んできた。誰かがおいしいところを齧り取ったように見える、骨付き肉というよりは肉付き骨と、朝と同じ干からびたパン、そして腐る寸前の葡萄を夕食と呼べるのなら――だが。

朝とは違って、母娘は文句を言わずにそれらを咀嚼し嚥下した。いや、ミリアムだけは恍惚として残飯めいたしろものにかぶりついた。苦勞して骨を叩き割って、その中身を啜りさえした。丸一日を超える絶食は、まだ乙女とも呼べぬ少女を屈服させるにはじゅうぶんな拷問だったのだ。

もしもこれがほんとうに兵隊たちの食事なのだとしたら、庶民から略奪せぬという誓約が守られている証しではあった。例外は、台所の井戸から汲んだとわかる清冽な水だけだった。

食事が終わると母娘は、本日二度目になる屈辱の見世物を演じなければならなかった。かなりに馴致されてしまったのか、オリティ

アも意識して力を抜かずともすぐに尿を迸らせた。それでも、固形物をひり出したミリアムの肛門が硬い刷毛で洗われたときには顔をしかめた。苦痛と羞恥に呻く娘に同情してではなく、朝と同じ水がそのまま使われることを不潔に思っただけのことだった。

そして母娘は、鉄格子にではなく新たに取り付けられた壁の鉄環に首の鎖をつながれて、二日目の夜を迎えた。手足の鉄環はそのままで、昨夜とは違って両手を背中で拘束されることもなく、自由に動かせた。

その気になれば、首の鎖をはずせたかもしれない。鍵が掛かっているわけではなく、頑丈なボルトで締めつけられてもいない。鉄鎖の一部が開閉する仕掛けになっているらしい。しかし、三人ともそれは試みなかった。鎖をはずせても、またつなげるとはかぎらない。もしもはずしたままでいたら――拷問の前に懲罰まで加えられるかもしれない。

母娘で抱き合っていられれば、それでじゅうぶん。そんな惨めな境遇に安らぎを覚えるほどに、三人は打ちのめされているのだった。

徹夜で消耗していたのだろう。夏の長い薄

明が残るうちに、ミリアムは深い眠りに落ちていった。

しかしオリティアもリゼットも、睡魔よりは明日への恐怖に心身を支配されていた。

「あの強欲な野蛮人を納得させることは出来ないでしょうね」

オリティアが深いため息をついた。

「有るのであれば、実物を見せれば満足するでしょう。けれど無いという事実にはなんの説得力也没有せん」

それは証明の問題だと、論理学までかじったことのあるリゼットは考える。ここには無い、あそこにも無いという個々の事実は証明できても、まだ探していないどこかには存在する可能性が残されているのだ。

「でも……書物にはっきりと記されていれば、あの男も信じるしかなくなるのではないでしょうか」

「まさか、あなたは……」

オリティアの声が高くなった。天井に吊るされた笠に声が反射して牢獄に響いた。

「まさか、レナール公列伝のことを言っているのではないでしょうね？」

リゼットが考えているのは、まさしく、その、まさかだった。

「列伝のどこかにミスリル銀の経緯が記されているとは、ヴィーから聞いています。でも、あれの存在を野蛮人に、いえ世に明かしてはなりません。この国の忌まわしい秘密があばかれてしまいます」

きょとんと、リゼットは母親の顔を見つめた。

「でも、母様。わたくしは二十巻までしか読んでいないけれど、ミスリル銀のほかには、退屈な年代記ばかりよ」

一代につき一巻の列伝は、さまざまな厚さで四十五巻まである。

「二十巻も読んだのですか。道理で……」

第一公女のお姿が見えないときは、居室でなく剣術の稽古場か書庫を捜せ（付け加えるなら、けっして台所にはいない）と、かつて使用人のあいだで申し交わされていたはずだと言いかけて。オリティアは落胆とも安心ともつかぬ吐息をもらした。

「そう……第一巻を読んでも気づかなかったのね。あなたのためにも、この国のためにも、

それは幸いなことでした」

「母様は、その秘密をお気づきになったの？」

「いいえ」

自身は列伝を読んでいないと、母は娘に打ち明けた。公妃といえども書庫への出入は制限されていたし、そもそも彼女は古典文字を読めない。すべてはふとした折に夫から聞いた話だった。ミスリル銀の発見から喪失に至る経緯も、そのひとつだ。

そのような話は、あらためて人払いせずとも余人を交えぬ場、つまりは寝物語なのだが、その機微を理解するほどリゼットは世間知を持ち合わせていなかった。

「母様のおっしゃる忌まわしい秘密がなんであれ、あの男にミスリル銀など地上に存在しないのだと納得させることのほうが重要だと思います」

リゼットは断言した。

「あの男の手にミスリル銀の剣が握られれば、文字どおりに世界はつぎつぎと切り取られてゆくでしょう」

「……………？」

今度は、オリティアが娘の顔を見つめる番

だった。

「まるでミスリル銀が有るような物言いですね。リゼット、あなたは母様の知らない秘密を知っているのですか？」

母親が愛称でなく正しく娘の名を呼ぶときは、たいていお小言かお仕置きが待っている。しかも、こんなにていねいな言葉づかいともなると、お尻をスカートの上から叩かれるだけではすまないだろう。けれどリゼットも、もう子供ではない。ミスリル処女騎士団長、いや騎士団を家臣に持つレナール公の第一後継者なのだ。正確には、公妃継承者である。身分ある女性が社会でなにがしかの役を果たすことに寛容なこの国でも、女子に継承権は認められていない。リゼットの夫になる男が、つぎのレナール公なのだ。もし、レナール公国が存続していればという架空の話だが。

「ミスリル銀は地上に存在しないと、レナール公列伝にはたしかに書かれています。それを疑う理由など、髪の毛一本もありません」

リゼットは真実を語っていた。しかし、自分がなにかを知っているということについては母親の質問に答えていなかった。

3. 妹姫の拷問

囚われて三日目。母娘は、ときおり人の気配を感じることもあった。考えてみれば、牢獄に見張り番がいないというのは不自然にも思えた。姿は見えなくても、階下で三人の動静をうかがっているのかもしれない。

しかし、声をかぎりに呼ばわってもいられはなかった。夜中に目覚めても呼び鈴を鳴らせば侍女が飛んでくる生活に慣れ親しんできた母娘だった。急激な環境の変化に馴染んでいない——人の気配は幻覚だろうとも考えた。

鎖につながれ、首にも手足にも自分では開けられない鉄環を嵌められ、しかも素裸だ。塔の中を探しまわっても、衣服はおろか身を包む布すら見つからないだろう。逃げたくても逃げられない。必ずしも見張り番を置く必要はないのだ。

見張り番がひそんでいようといまいと。亡国の三日目は、すくなくとも正義の鉄槌の塔の周辺では静かに終わろうとしていた。かりに街で阿鼻叫喚が呈されていようと、林に遮

られてここまでは騒ぎが聞こえてこない。レナール国の香りがするパンと新鮮な牛乳が加えられて、食事情も改善された。レナール家の人間としては、それが略奪の果実ではないかと懸念しながら、虜囚としては、浅ましくもそれを喜んだ。

初夏の長い薄暮も黒く塗りつぶされる頃。フクロウの鳴き声と羽音、そして虫の鳴き声だけが響く静寂を複数の足音が破った。足音は塔の真下で止まり、ついで木の扉が開閉する音。

階段口に松明の明かりが揺れて、四つの人影が拷問部屋に立った。黒鉄の鎧など必要ないのではないかと思わせる筋肉、兜を脱いでもかぶってもあまり変わらないように見える黒髪と黒髭のグスタフ。酒樽のようなベリエ。そして、拳闘士と紹介されれば誰も疑わないだろう、浅黒い肌を晒した二人の巨漢。

この二人は拷問吏だと、オリティアもリゼットもミリアムも悟っている。

「ミスリル銀の隠し場所を白状する気になったかな？」

やわらかく威圧的にたずねるグスタフ。

「昨日も申し上げたとおりです。無い物の隠し場所など、どこにも無いのです」

グスタフは、鼻から盛大に息を噴いた。

「では、やむをえんな。拷問に掛けるしかあるまい」

グスタフは後ろに下がって、新品の長椅子に腰を下ろした。

巨漢の一人とベリエが鉄格子を開けて。首環の鎖をはずして檻から引きずり出そうとしたのはミリアムだった。

「なにをなさるのです！？ 拷問を受けるのは、わらわのはずです」

「そのとおり。わしは娘を愛する母親を拷問に掛けておるのだ」

わけもわからずに中央へ引っ立てられたミリアム。その手足に嵌められた鉄環に太い鎖がつながれた。

足首の鎖が左右に引っ張られて、いやでも両脚が大きく開く。二人の巨漢は、鎖の端を壁の鉄環につなぎ留めると、つぎの段取りにかかった。ミリアムの手首につながれた鎖は、天井の滑車から垂れている。反対の端を二人が引き下げると、前を隠している両手が引き

上げられて――ミリアムは母と姉に正面を向けて、X字の形に吊られた。手首の痛みを減らそうとして鎖を手でつかみ、そのぶん踵は宙に浮いている。

「痛い……もう、赦して」

痛いだけでなく。股間も腋の下も、すべてを晒している。少女にとっては耐えがたい恥辱だった。

「赦すもなにも、まだ拷問は始まっておりませんぞ」

ベリエが拷問吏のひとりを呼びつけて、壁の一面を指さした。拷問吏が手にしたのは、恐ろしく長い一本鞭だった。

「その男は、砂漠の国で刑吏を務めていた。大の男を鞭の一撃で殺すことも、小娘を失神させずに百回泣き叫ばせることも、自由自在だ」

グスタフが静かな声で説明を加える。そして。母親としてはどのように娘を鞭打たせたいかと、答えられるはずのない質問を投げかけた。

「おお……お願いですから、わらわを鞭打ってください。こんな子供がミスリル銀の秘密

を知っているわけがないではありませんか」

「他国から嫁いできた母上こそ、国の機密には近づけぬはず。わたくしは騎士叙勲を受けた日に、父上から口承を受けている。グスタフ、責めるならわたくしを責めよ」

母と姉は競うように、みずから拷問を望んだ。

グスタフはそれを無視して、鞭打ちの執行を拷問吏に命じた。。

「ごく軽く一発だけ、尻にな」

浅黒い肌の巨漢は三步の距離を隔ててミアムの背後に立って。右腕を軽く振った。

ひゅん……パシッ！

グスタフが床を打ったときとは比べものにならない、小さな鞭の音。しかし、少女の口から迸った悲鳴は、母と姉の心臓をすくみあがらせるにじゅうぶんだった。

「きゃあああっ……！」

少女の肢体が弓なりに反って、それからがくんと力が抜けた。

「どうだ、小娘。もうちょっとだけ痛いのを、あと十発ほど喰らってみるか？」

「いやあ……」

ミリアムの中から涙がこぼれた。

「いやよ、いや。もう虐めないで」

しゃくりあげながら訴える。

「それなら、母と姉に頼むのだな。ミスリル銀の秘密など、さっさと教えてしまえと」

ひくっと、少女が息を呑んだ。神秘の伝説に包まれた武具。その秘密があばかれるとどうなるのか、少女には想像もつかない。

けれど、母様も姉様も、そんなものは無いとおっしゃっている。無いということが秘密なのか、本当は有るのに隠していらっしゃるのか。少女は混乱していた。

たったひとつだけ、わかりきっていることがある。母様も姉様も、わたしが虐められれば悲しまれる。わたしの代わりに自分を拷問にかけてくださいとまでおっしゃった。そうまでして守りたい秘密があるのなら……

「お好きなだけ鞭打ってください。あんなの、十発でも百発でも平気です。もう、泣いたりはしません。ええ、泣くもんですか！」

ミリアムは泣くのをやめて、凜とした声で言いはなった。

7歳のときだった。初めてロングスカート

を着けて、隣国の大使をお迎えしたとき。裾を踏んづけて、転んでしまつて。すごく痛くて泣きたかったけれど。なにがあつても絶対に泣かないってお母様に約束してたから、涙をこらえて微笑んだ。ちゃんとお辞儀もしてみせた。お父様お母様お姉様だけじゃない、ユーゴ大臣にもロッシェ書記官にも、そしてみんなから褒められた。そうよ。あのときと同じ。そりゃ、あのときよりもずっと痛いんだけど。でも、私は7歳じゃない。もう●3歳。それだけ強くなってるんだから。

グスタフが、意地悪く母と姉に視線を向けた。

「なんと健気な申し出ではないか。小娘の願いをかなえてやることに決めたぞ」

お遊び程度で背中に十発と命じられて、拷問吏が鞭を斜めにかまえる。

ひゅううん、バシッ！

ミリアムの四肢が再び突っ張ったが、最初みたいに大きな反応は見せなかった。

最初の一発は、そんなふうに鞭打たれた経験がなかったから衝撃を受けた。少女にとってお仕置きとは、手の甲を乗馬鞭で打たれる

とか、お尻ならスカートを捲られて（でも下着は残して）平手で叩かれるくらいだった。まるで次元の違う痛みと焼けるような熱さに驚いたのだ。

でも、今度は。最初のよりは痛かったし背中だったけれど、不意打ちではない。こんなの、十発なんてどうってとこないわ。少女は自分にそう言い聞かせて、激痛に耐えようとした。

二発、三発と背中を鞭打たれる。左肩から斜めに、つぎは右肩から。それから真横に一発。

「くっ……あぐっ……」

悲鳴を押し殺しているが、のけぞって大きく口を開けて喘ぐさまが、母にも姉にも見られているとまでは思い至らない。

床にへたり込んでいるリゼットは、正視しかねて顔をそむけ、目を固く閉じている。握り締めた拳がぷるぷる震え、鞭の音が響くたびに、びくっと肩を震わせていた。

オリティアは、壁につながれた鎖が許すかぎり前へ出て鉄格子をつかんで立ち、歯を食いしばって愛娘が鞭打たれる光景を凝視して

いる。

そうして十発。鞭の音がやみ、ミリアムはがくっと首を垂れた。

「ほんとうに痩せ我慢をとおしてしまいおった。たいしたものだ」

グスタフがつぶやく。わざと母娘に聞かせようとしたのではなく、思わずもらした本音の響きがあった。が、強情であればあるほど、もっと虐めてみたくなるのが嗜虐者の性癖でもある。もちろん、泣き叫んでくれれば、それはそれで心地良いのだが。

「背中が焼き上がったが、尻は生焼けだ。遊ぶのはやめて、折檻を五発」

ぶうん……鞭が宙を切る音が変わった。

バシイン！ 打撃音も重くなった。

「あがっ……！」

のけぞって、それでも悲鳴をこらえるミリアム。

「ふむ。薄い尻が、面白いようにひしゃげるな。肌が裂けて血が飛び散ったぞ」

グスタフが、母娘から見えない部分を残酷に描写した。

「お、おのれ……悪魔め！」

ミリアムが歯ぎしりして、それでもグスタフに聞き咎められぬよう声を殺して呪詛した。

オリティアは、あいかわらず鉄格子にしがみついて凄惨な光景を凝視している。凍りついた表情の上にとめどなく涙を流しながら。

五発目が終わると同時に、つま先立ちをしていたミリアムの脚から力が抜け、握り締めていた鎖も手からすり抜けた。脱臼したのではないかと思うほど肩を吊り上げられた姿で、少女は気を失っていた。

「母様……！ ミリアムをこんな目に遭わせてまで、公国の忌まわしい秘密とやらを守らなければならないの？ もう、レナール公国は亡んだというのに」

母は無言。ただじっと、グスタフの一挙手一投足を見つめている。

はたして。ベリエが小さな壇の栓を抜いて犠牲者の鼻先に突きつけると。

「あ……いや……いやよ、もうやめてよう」

ミリアムは意識を取り戻したが、まだ朦朧としている。

「裏はこんがりと焼けたが、表がまだだな」

オリティアとリゼットを脅すのも忘れて、

グスタフは嗜虐にのめり込んでいた。あるいは、計算ずくでの演技かもしれないが。

「尻と同じくらいで、胸にも五発」

「ひ……」

ついにオリティアの口から悲痛の声がもれた。しかし、無駄な慈悲を願ったりはしない。リゼットに対しても、ミスリル銀の存在を否定する証拠を明かせとは言わない。

拷問吏が犠牲者の斜め前に立った。母娘の視界を遮らぬよう、じゅうぶんに配慮した立ち位置だった。

ぶうん、バシイン！

双つの丸みが四つに分かれたかのようにひしゃげ、ぷるんと跳ね返った。

「いぎゃあっ……！」

少女が絶叫した。その絶叫が尾を引くうちに二発目が叩き込まれる。

「……あがっ！」

悲鳴が途切れたのは、吐き出す息がなくなったからだ。拷問吏もそれくらいは承知で、わざと手を休めて悲鳴の準備をさせる。

「はあ、はあ……不意打ちとは卑怯よ」

激痛に正気と呼び覚まされて。ミリアムは

脚を踏ん張った。

「さあ、どうぞ。もう叫んだりするもんですか」

ふた筋の赤い線が刻まれた乳房を突き出す。年のわりには発育した、●6歳の姉（こちらは年のわりに未熟なのだが）とそれほど変わらぬ膨らみを。

「やめて、もうたくさんよ！」

叫んだのはリゼットだった。

「証拠はある。たしかな証拠が……神秘の金属など存在しない。かつては存在して今は失われたという、たしかな証拠が」

「おやめなさい、リゼット！」

母が振り返って、娘を叱った。

「列伝の存在を明かしてはなりません」

「どうして……亡んだ国の秘密なんか、どうでもいいじゃないの。わたくしには、妹のほうが大切だわ。母様はそうじゃないの？」

どういたしましょうと、拷問吏が主人に目顔で問うた。

国の支配者が、変化する状況に対応できなければ、平和は乱れ戦争は負ける。グスタフは間髪を入れずに命じた。

「毒蛇を一発。壊さぬようにな」

拷問吏がふたたび少女の背後に立った。さっきより半歩ほど近い。

「やめろ。白状するから。もう妹を苦しめるな」

拷問吏は垂らしていた腕をそのまま前へ振った。鞭の先端が遅れて床を這い、少女の真下で跳ね上がった。

しゅるるる、バシイン！

鞭は股間をまわりこんで少女の峡谷をえぐり、毒蛇のように鎌首をもたげて、もっとも敏感な肉芽を打ち据えた。そして。

「ぎいいいいいっ……！！」

鞭は素早く手繰られて、未踏の峡谷をさらに深くえぐった。

「……………！！」

悲鳴すら奪われて悶絶する少女。

姉の髪よりも赤い筋が、少女の太腿を伝い落ちている。

「どうして……白状すると言ったのに」

詰問ではなかった。母のせい、いや自分のせいだ。言い争いなんかせず、ひたすらグスタフに訴えつづけていれば……。

ミリアムは鎖の磔から解放されて。再び檻の鎖につながれた。

「証拠は明るいときに見せてもらおう。明日の昼までには迎えをよこす」

グスタフが長椅子から立ち上がった。

「跡始末を頼むぞ」

ベリエに言い置いて、さっさと引き上げる。

拷問吏が鎖を元の位置に戻して鞭を壁に掛けると、ベリエも母娘に背を向けた。

「待ってください」

オリティアが呼び止める。

「娘は大怪我をしています。医師の手当てを受けさせてやってください」

「それはけがが小さい。たくさん見てきた。三日でなおる」

答えたのは、ミリアムを鞭打った男だった。乾燥した砂漠の風土での体験を語っているのだろう。

「いいえ、このままでは傷口に悪い風がはいって、生命にかかわります」

オリティアは慈悲施療院の名誉院長を務めている。名前だけでなく、週に一度は実際に出向いて医師の手伝いもしていた。ちょっと

鎌で切っただけの脛脛が紫色に腫れて、そこから毒素が全身にまわって死んだ農夫を看取ったこともある。

「明朝にでも陛下にお伺いを立ててみよう。証拠とやらの満足されれば、医師くらい用立ててくださるだろう」

「明日では……」

言いさして、オリティアは唇を噛んだ。クローブ国の人間に慈悲を求めるのは間違っていると、思い知らされたばかりなのだ。

「では、せめてきれいな水を。それと、シャツの切れ端でもかまいませんから布をすこしばかり」

「血を拭いて傷を洗うのですかな？」

「そうです」

ならば――と。ベリエは拷問吏に命じて、二日前から置きっぱなしにしてある天水桶を檻の中へ運ばせた。そしてポケットからハンカチをつまみ出して鉄格子の隙間から落とした。

「ちょうど捨てる頃合です。恵んでさしあげましょう」

それ以上は聞く耳を持たぬとばかりに、二

人の拷問吏を追い立てるように階段口を下りていった。

月明かりの中で、オリティアは途方に暮れた。

目の前で、下の娘が血まみれでうつ伏せに倒れている。姉が頭と肩を膝に抱いてやっているから、床に打ち捨てられているよりはましたが、すでに傷口に取り憑いたかもしれない悪い風を追い払う役には立たない。傷口を洗って包帯をしてやりたいのに、与えられたのは自分たちの糞尿が溶け込んだ汚水だった。そして布は、さんざんに鼻をかんだボロ屑。どちらも悪い風を呼び寄せることを、オリティアは経験的に知っている。

ここまで無い無いづくしだと、手の打ちようがない。オリティアは気が狂いそうだった。獣でさえ、自分の傷を舐めて治すというのに……そう、それだわ！

「リジ、そのままじっと妹を支えてやっていてね」

言葉で説明して、また言い争いになってもつまらない。オリティアは鎖が娘の傷に触れないよう注意しながら、四つん這いになって

床に肘をついた。娘の背中に顔を近づけて。その傷口に舌を這わせた。

「母様……なにをなさるの？」

しかし。そのようなはしたない真似を、敢えて止めようとはしなかった。リゼットも思い出していた。刺草の棘で傷ついた指を本能的に舐めて、乳母にたしなめられた幼い記憶を。あれは気持ち良かった。では、母様のしていることは浅ましく見えても、妹の苦痛を軽くしてやれるのだろう。

オリティアは口をすぼめて唾を絞り出しては、娘の傷を舐めつづけた。口中に溜まる血の味。それを吐き出すことなく飲み下す。唾を吐くなんて淑女にあるまじき振る舞い。あるいは娘の痛みを引き受けてやりたいとの思いからか。リゼットの目にも、それはごく自然な行為のように見えた。

肩から尻まで舐め終えて。もうどうやっても唾のひとしずくも湧いてこず、舌は痺れていた。そして、平常心をいくらか取り戻してもいた。

落ち着いて見れば、傷はそんなにひどくない。肌は細く裂けているが、肉までは傷つい

ていなかった。周囲が腫れて盛り上がっているから、傷はじきにふさがらう。

背中に十本、尻には六本の鞭跡。同じ場所を重ねて打たれて傷が広がったところはなかった。

施療院では患者に同情はしても冷静に対処できたが、やはり実の娘のこととなると愚かな母親でしかなかった。母親を拷問するために娘を痛めつけるというグスタフの狡猾さと残忍さとに、オリティアはあらためて戦慄した。

乳房の傷を清めるために娘をあお向けにしようとしかけて、困惑した。あお向けにすれば、たったいま清めたばかりの傷口が床に触れる。背中をリゼットの膝に乗せても、尻が床につく。

母の躊躇を、リゼットは理解した。彼女に看護の経験はなくても、母がなにに注意して妹の傷を清めていたのかはわかった。

「母様、わたくしにもミリの手当てをさせてください」

娘の求めに応じて、オリティアは仰臥した。

リゼットが、母の腹の上に妹をあお向けに

寝かせる。

「転げ落ちないように抱いてやって」

リゼットは、妹の胸を見おろした。自分と同じくらいに盛り上がった乳房。そこに五条の傷が刻まれ、紫色に腫れている。

リゼットは母と同じように四つん這いになって、妹の胸に顔を伏せた。舌を突き出して、できるだけそっと傷を舐めた。

ぴくっと妹の身体が震えた。背中や尻よりもはるかに敏感な乳房。意識を失っていて、舌先で触れられたただけでも反応する。それをあんな巨漢に鞭打たせるなんて……リゼットの口の中に広がる血の味は、そのままグスタフへの憎悪だった。

リゼットも母にならって、舐め取った血を床に吐き捨てたりはしなかった。憎悪が腹に溜まってゆく。

「ありがとう。よくやってくれました」

母にねぎらわれても、リゼットは顔を上げなかった。太腿にこびりついた赤い筋。

身体をずらして、妹の股間に向き合った。ふっくらしてすべすべな、そこ。傷口は見当たらない。

自分は禁忌を冒そうとしているのではないかという想念が、一瞬うつろった。しかし迷いはなかった。盛り上がって閉じ合わさった双つの丘の割れ目に舌先を触れた。

「おお……」

オリティアの短い声は、長女のはしたない行為をとがめるそれではなかった。

この三日というものの洗うどころか清拭すらできなかったそこは、饅えたような臭いがしていた。清純な乙女にはそぐわない、獣めいた臭い。しかしなぜか、リゼットはそれを不潔とは思わなかった。

舌先を割れ目の奥へ伸ばす。自分の唾ではない湿り気と、そして血の味。リゼットは本能的に唇を股間に押し当てて、傷口を探るように舌を蠢かせた。

妹の身体が、またぴくっと動いた。

「う、ううん……」

意識を取り戻しかけている。リゼットは安心すると同時に、急に恥ずかしさを意識した。

大急ぎで唾を溜めて割れ目の奥を舐め、音を立ててそれを啜った。そうして身体を起こしかけて、鞭の先端が当たった箇所を思い出

した。

そこも舌に絡め取った。くりんとした舌触り。

今度は妹の腰が、びくんと跳ねた。

リゼットが顔をはなすと同時に、妹が目を開けた。

「お母様……」

自分を逆さまに覗き込む母の顔を見上げて、ミリアムは弱々しい声で、しかし誇らしげにつぶやいた。

「わたし……最後まで耐え抜いたわ」

「ええ、立派でしたよ」

娘の髪を撫でてやりながら、オリティアは大粒の涙をこぼした。

リゼットも泣きながら、妹の身体を母の上でうつ伏せにしてやった。

母に抱かれて安心したのだろう。ミリアムはじきに安らかな寝息を立て始めた。

その一部始終を、天井に吊るされた笠の隙間から覗いている者がいようとは、母も娘も気づかなかった。

——ニコラ・ベリエは、母娘が眠りに落ちるのを見届けてから、下の笠と金属管でつな

がっている小さな喇叭の蓋を閉じ、分厚いじゅうたんの上を忍び足で窓から外に出て、梯子で地面に降り立った。

牢番が置かれなかったのは、囚人に自由な会話をさせて、ミスリル銀の秘密を盗み聞きしようという企みだった。昨夜はそれなりの収穫があったのだが、今夜は無駄足に終わった。そのせいだろうか、月明かりの下でベリエの顔は忌々しげに歪んでいた。

4. 公邸の略奪

朝の屈辱の儀式が終わったあと、リゼットだけは手首の鉄環を背中で拘束されて、外へ連れ出された。

四日前は、父を殺された驚愕と憎悪、捕虜にされた屈辱とで頭がいっぱいだったが。ある程度は平常心を取り戻した今は、一糸まとわぬ姿で連行されることに耐えがたい恥辱を感じる。

「せめて、腰布の一枚でも与えて……ください」

リゼットとしては、最大限にへりくだった懇願だった。

「そんな物は持ち合わせておらぬが」

先に立って首環の鎖を引いていたベリエが振り返って、リゼットの下半身に目を落とした。

「要は、股ぐらを隠したいのですな？」

小男の誘導尋問に引っ掛かって、リゼットは「はい」と答えてしまった。

「それくらいはお安い御用ですぞ」

ベリエはリゼットの首環から鎖をはずした。それで腰を巻いて後ろで留めた。兵士のひとりに命じて大きな木の葉を持ってこさせ、それをリゼットの股間にあてがった。

リゼットは屈辱をつのらせたが、それでも恥部をすこしは隠せるのだからと、おとなしくしていた。しかし。

後ろに垂れていた鎖の端を股間に通されて前で引き上げられると。

「な、なな、なにを……」

秘唇を割って食い込む硬い感触に、リゼットはうろたえた。

「葉っぱが落ちないようにして差し上げておるのだが？」

ベリエが鎖を引き絞った。

「くう……や、やめ……」

おぞましい感触から逃れようとして腰を引いたのがいけなかった。鎖がますます秘唇に食い込み、リゼットは言葉を詰まらせた。

股間を割った鎖が腰の鎖と重ねられて小さなボルトで留められた。

「では、ミスリル銀の秘密に案内していただきましょうか」

短くなった鎖の端をつかんで、ベリエが引っ張る。前へというよりは斜め上へ。

「あう……ま、待て。こんなのは、いやだ。取ってくれ」

食い込んでくる鎖を緩めようとして、リゼットは自然と前へ歩く。木の葉などふたつに折れて、淡い恥毛が丸出しになっているのだが、それに気づく余裕もない。

「そういつまでも、姫君のわがままにはつきあっておられませぬでな」

リゼットの声を聞き流して、ベリエはさらに強く鎖を引っ張った。

林を抜けて裏庭へ出て。そのまま裏口へは行かず、表門までわざわざ屋敷の外を引き回された。いたるところに黒い革鎧姿の男たちがいた。

彼らの好奇と好色の目に裸身を晒す屈辱にリゼットは、四日前は磔にかけられても毅然と上げていた顔を自然と伏せた。すると、股間を割る鎖と赤い絨毛とが視野にはいつて、ますます羞恥がつのる。

しかし羞恥は、レナール公邸へ足を踏み入れるや、怒りに上塗りされた。調度品の大半

が消え失せていた。作りつけの家具類も扉が開きっぱなし、抽斗は床にうっちゃられている。

肖像画も鎧飾りも略奪されつくした主廊下の突き当たり、謁見の間に引きずり込まれて。リゼットは目を疑った。

公座にグスタフがおさまっているのは、むしろ当然なのだが。片側に三人ずつ居流れた男たちのうちの二人は、リゼットの見知っている人物だった。ユーゴ大臣とシャイエ小姓頭。レナール公の腹心ともいうべき彼らが寝返っている。さすがに二人は、の連中と違って、元の主君の姫君から目をそらしているが。

グスタフが立ち上がった。

「では、ミスリル銀の秘密に案内してもらおう」

付き従うはベリエと、彼に鎖を握られたリゼットのみ。案内を命じながら、グスタフが先頭に立つ。謁見の間を奥に抜けて、枝分かれした廊下をあやまたず書庫へ向かった。

リゼットは、その不自然さに気づけなかった。

人の目が減ると、かえって股間の違和感に

注意が集中して、粘膜をこすられる刺すような痛みの奥にひそむ妖しい感覚に気づいてしまった。裸馬の背で股をこすられていたときの感覚に似ている。自慰さえも知らぬ乙女は、歩くたびに秘唇をこねられるような、しかし不快とばかりはいえぬ疼きに戸惑っていた。

書庫の鍵を開ける手間を省いて、扉を蹴り破るグスタフ。

「ふうむ。五百年も書物を貯め込むと、こうなるのか」

グスタフは本気で驚いたらしかったが、中央世界では珍しい光景ではない。五十冊ほどの博物書と歴史書、分厚い全巻聖書、建国以来の最重要外交文書を収めた五つの箱。梱包された肖像画も百点ほど。

「いちばん奥の書棚にならんでいる書物の右から八冊目。その十五ページだ」

ベリエに催促されて、リゼットはミスリル銀の記述がある箇所を教えた。

グスタフが書物を取り出して、そのページを開いた。

『……しろい、ひかる、きんぞく？』

リゼットは驚いた。古典文字を読める者は、

学者と聖職者を除けば、一部の貴族くらいだ。それを、この野蛮人は、ひと文字ずつたどりながらも、意味を追っている。

しかし書物がグスタフの手に余ったのも事実だった。ベリエに読ませる。

『シャルル、アルキポスより未知の金属を献上さるる……陛下、ありましたぞ！』

ベリエが興奮して叫ぶ。錬金術師を名乗るなら、当然の反応だろう。

「続きを読め」

グスタフは醒めている。

『白色に輝く金属は鉄よりも軽く鉄よりも強靱であった。公、これをミスリル銀と名づく』

ベリエは、すらすらと訳していく。

『公、錬金の手間と費用とに驚愕し、鉄の百倍以内にて精錬する術の研究をアルキポスに命ず。アルキポスは、精錬術の完成までズボンの着用を禁ぜらるる……なんじゃ、これは？』

「ふむ……外出を禁じられたのかもしれぬ。素裸で庭を闊歩する姫君もいるがな」

グスタフにからかわれても、リゼットは怒りも恥ずかしがりもしなかった。そのかわり。

「しかし術は未成のまま、アルキポスはに殺された」

ベリエのあとを引き継いで列伝を暗誦した。「アルキポスの遺骸は、神の御業を恐れるつましき人々の手にゆだねられた。このようにして、ミスリル銀の一切は地上から消失した——もはや、ミスリル銀そのものも、その錬金方法も失われているのだ」

リゼットは文章の一部を意図的に略していた。正確には

『しかし術は未成のまま、アルキポスは厳格派の男たちに辱められ殺された』である。

この短い記述には、真実を暗示するいくつかの言葉がある。そのひとつが、厳格派だった。グスタフもベリエも本筋に関係のない（ように思える）事柄にまでは注意を向けないかもしれないが、自分が暗誦することで、いっそう確実に真実を覆い隠せたと、リゼットは信じた。ミスリル銀は失われたと正史に書かれてあれば、グスタフも信用せざるをえないだろう。

しかし、グスタフの反応はリゼットを失望させた。

「やはり、ミスリル銀はあったのだな。ひとたび発見された金属なら、あらためて発見されてもおかしくはない。この男は――」

グスタフは小男の肩にどすんと手を置いた。ベリエが痛みに顔をしかめる。

「当代随一の錬金術師だ。必ずわしの期待に応えてくれるだろう」

ベリエは第八巻を書棚に戻し、ふと思いついたように、薄い第一巻を取り出した。最初のページから目をとおしていく。ページをめくる手つきは早い。

グスタフはその意図をたずねず、じっと見守っている。

やがて、小男の手がぴたっと止まった。

「なるほど……これでは、教会もレナール公を王と認めるわけにはまいりませぬな」

レナール公国は三つの城塞都市と四万人の人口を抱える。諸王国の中には、ただ一つの都市しか持たぬ国もある。レナール公が王を名乗らぬのは、戴冠式に伴なう教会への多額の寄進を惜しんでのことと、リゼットも庶民も他国も考えていたのだが。

『ファビオは●9歳のとき、その生涯を共に

過ごしてきた●6歳のファビエンヌに子を産ませる。すなわち、建国者エロワなり』

リゼットは●2歳のときから列伝を読み進めてきた。当時ほとくに疑問も抱かずに読み飛ばしたのだが。

「陛下、おわかりでしょうか？」

「この記述と教会と、なんの関係があるのだ？」

（あ……！）

卒然と、リゼットは理解した。●9歳までの生涯を共にしてきたのなら、ファビオとファビエンヌは同じ屋根の下で育ったのだ。そして、同じ名前の男性形と女性形。ふつうは神に授かると書くべきなのに、産ませたという表現。それらの事柄は書かれていて、ふたりが結婚したとは書かれていないという事実。
（おお……まさか！？）

愛娘を犠牲にしてまで建国の秘密を隠そうとした母の苦悩が、ようやく理解できた。

「つまり、この二人は兄と妹だったのでしょう。妹の名は、おそらく寓意でしょう」

ベリエは、リゼットが達したと同じ結論を口にした。悪魔の所業で生まれた不義の子に、

国を建てることなど許されぬ。レナール公国の礎が粉碎された一瞬だった。

「つまらん。ミスリル銀のほかは、もう寄り道するな」

グスタフは一蹴した。

まったく逆の意味で、リゼットも彼と同感だった。

（過去の醜聞なんか、ミスリル銀の真の秘密ほど大切ではないわ）

その秘密を隠しとおせるかどうか、リゼットは不安になってきた。ベリエは、すくなくともリゼットと同じ程度には賢い。彼がリゼットほど公国の歴史に詳しくもなければ関心もないだろうことと、彼が女性ではないこと——この二点だけが、リゼットの有利な点だった。ベリエが錬金術師であることは、リゼットの不利にはならない。レナール公列伝の記述からだけでは、その錬金法はうかがいしれないのだ。

「おまえは、もうすこし知っているようだが……それはいずれ聞き出すとして。わしはわしの計画を進めるまでだ」

グスタフの言葉は、またも謎めいていた。

謁見の間の手前で、ベリエはリゼットを別の方向へ追い立てた。グスタフに代わって、新顔の兵士がふたり、護送にあたった。

素裸で拘束されていても、その気になればベリエ一人だけなら殺すこともできる。その報復に三人そろって処刑されようと妹が鞭で打ち殺されようと、この小男は抹殺すべきかもしれないと思い始めていたリゼットだが、これでは無理だ。選べない選択に苦悩するよりは、兵士の視線に晒されているほうが、心安らぐくらいだった。もっとも。お姫様当番に志願しない兵士はなく、当番をした者の口から彼女たちの一挙手一投足が、ことに排泄の様子など微に入り細を穿って伝えられ、最初の兵士が言ったように全軍布告されていると知っても、心穏やかでいられたかどうかは疑問だが。

謁見の間への通路をそれて、家族の寝室がならぶ区画に差しかかると。廊下に十名以上の兵士たちがうろついているのが目にはいった。兵士たちは、あわてて手近の部屋へ逃げ込む。

リゼットがいぶかしんでいると。

「もう、もう……赦して。死んじゃう」

通りかかった部屋の中から、か細い鳴き声がもれてきた。

「死ぬのは女の特権だ。もっといい音色で泣いて、どんどん死にな」

ぎやははと嗤う複数の声。

リゼットの足が止まった。鎖を引っ張られても、腰を引いてさからう。

「貴様ら、まさか女性を……！？」

ベリエが無言で、扉のひとつを開けた。そこはレナール公の寝室だった。装飾のほとんどが剥ぎ取られた部屋の中で、寝台だけは略奪から免れて――数人が絡み合っていた。

ズボンだけを脱いで鎧下をまくり上げた男たちが三人。ひとりは仰臥して、腹の上うつ伏せの娘を抱きかかえ、別の男が娘の背後からのしかかり、膝立ちになった三人目が娘の髪をつかんで口中に肉棒を突き立てているのだが、男女の正常な営みすら目撃したことのないリゼットには、複雑に絡み合った肉の塊としか見えなかった。しかし、娘が身の毛もよだつやり方で犯されているのは理解でき

た。

「約束が違うではないか！」

リゼットは大声でベリエをなじった。

「民には手を出さぬと誓ったのは、あれは嘘か！？」

「レナール公の財産は没収し、家族は投獄すると申しましたぞ」

公邸に住み込んで働く者は家族も同じだと、ベリエは言った。

「そんな理屈がとおるものか！」

「現に、こうしておるではありませんか？」

「やめろ！ 今すぐ、その娘をはなせ……」

この部屋には寝台の上の三人と、あわてて逃げ込んだ兵士が二人。通路にはもっと大勢がいた。

「まさか、他の部屋でも？」

「この町に駐屯する兵は、おおむね一千。姥桜まで含めて二十名ばかりを、昼夜兼行で働かせておりますぞ」

「ぐぬう……野蛮人め」

「その中には、それがしを含まないでいただきたい。名前からおわかりのように、それがしは文明国の出自でしてな」

廊下での言い争いに気づいて、翩られている娘が振り返った。

「あっ、姫様……助けて！　いえ、見ないで。見ないでください！」

「ロジ……！？」

顔を見てリゼットは、犯されている娘が誰かわかった。

「あの娘は、通いの料理番だ。解放してやってくれ」

「ほかの女にあの野獣どもを差し向けろと？　いやはや、慈悲深い姫様であらせられる」

ベリエはリゼットの目の前で扉を閉ざした。
「いつまでもこうしては、兵どもが窮屈に感じるでしょう。さっさと立ち去ることにしましょう」

あいかわらず言葉だけは丁重に、ベリエは情け容赦なく鎖を引っ張った。それでもリゼットが頑として動こうとしないのに業を煮やすと、リゼットの背後に立っている二人の兵士に顔を向けた。

「陛下に代わって、それがしが許す。肌に触れてもよろしい」

歩きたくなるようにして差し上げろと、命

令にしてはにやついて言う。

「つまり、こういうことですかい？」

リゼットは、ぴしゃっと尻をぶたれたが、わずかに身体を震わせただけで動こうとしない。

「それよかは、ですね……」

「きゃあっ……！」

横合いから乳首をつままれて、さすがのリゼットも悲鳴をあげた。

「姫様、前へー進め」

号令口調とともに乳首を引っ張られては、強情も砕け散る。

リゼットが歩きだすと、乳首はすぐに解放された。それでも、股間を突き上げる妖しい疼きに足が乱れると、すぐに尻を叩かれた。叩かれる痛みは軽くても、さらに肌を撫でつづける掌から逃れるためには、前へ進まなければならなかった。

5. 公妃の淫舞

リゼットが牢獄へ戻されてからは、かさねての尋問とか拷問とかはなかった。母娘三人は牢番に見張られることもなく、鎖につながれたまま床に座り込んで長い半日を過ごした。

証拠の書物を見せられてもグスタフは納得しなかった。それどころか、みずからの手でミスリル銀を再発見するとまで言ったことをリゼットが告げても、母は驚かなかった。

「かつては存在したという明白な証拠を与えてしまっただけでしたね」

指摘されてみると、そのとおりだった。有るか無いかわからないものを探すのと、かつては有ったものを探す——再現しようというのとでは、意気込みが違ってくる。

「でも……あんな野蛮人どもにミスリル銀の謎が解けるとは思えない」

リゼットの言葉を聞いて、オリティアはまじまじと娘の顔を見つめた。しかし、なにも言わなかった。

母娘に与えられる食事は朝夕の二回。鎖は

便座に届かない長さに意地悪く調節されているので、排泄も朝夕の二回だけしか許されていないと同じだった。

その二回目が終わって、高い位置にある窓から差し込む月の光がじりじりとうつろい。

夜も更けてから、四つの人影が母娘の前に立った。鎧のような筋肉質の偉丈夫と、酒樽のような小男、そして肌の浅黒い二人の巨漢。

物音に目を覚ましたミリアムが、母の背中にすがりつく。

「そう怯えるな。今宵は尋問ではない。ひとつところに座ってばかりでは退屈だろうし、わしも政務に疲れて息抜きがしたいのだ」

リゼットは、今朝がた目にした光景を思い出した。

オリティアはそのことを娘から聞いてはいないが、グスタフの目の光を見て、彼の言う息抜きがなんであるかは検討がついた。

牢獄から引き出されたのは、オリティアひとりだった。娘たちは毒牙に掛けられずにすむらしいと知って、ほっとした表情だった。

手を頭の後ろで組んだ形で、手首の鉄環と首環とがボルトでつながれた。頭髮と同じ金

色の腋毛が、ふるふると震えている。

「まずは、これを吞んでいただきますしょう」

ベリエが懷から薬瓶を出して、オリティアの唇に近づける。

「はるか東にある古い大国からもたらされた酒でしてな。没薬やら強精薬やらをたっぷり調合した——媚薬というやつです」

たずねられもしないのに、ぺらぺらとまくしたてる。

「ひと匙舐めただけで、貞淑な尼僧でさえも男に抱きつき、裾をまくってみずから脚を開くといわれております。もっとも、三十倍の重さの黄金で購う秘薬ですから、そんじょそこらの女で気軽に試すわけにもまいりませんが」

そんな高価で劇烈な媚薬をひと壇まるまる飲み干せと、ベリエは強制する。

さすがにオリティアはためらったが、すぐに思いなおして、細い喉を震わせながら一気に飲み下した。こんな劇薬を娘たちに使われてはたまらない。そう考えたのだ。

古来、媚薬と称せられるものは、一種の興奮剤である。ベリエが語ったような強力な催

淫効果はない。媚薬を呑んだという思い込みが、ふだんは理性に抑圧されている性欲を解放するのである。すでにオリティアは、その術中に陥っていた。

「まずは、こちらへ」

オリティアは拷問吏のひとりに抱え上げられた。宙に浮いた円盤から鉄棒が突き出た踏み台の前へ運ばれる。

「夜毎に亭主の肉棒を咥えてきた公妃様には、これくらいがよろしいかな」

ミリアムの腕ほどもある木の棒を、踏み台から突き出た棒の先に嵌めこむ。先端が茸の傘のように膨らんでいるそれが、怒張した男性器を模しているとは、リゼットとミリアムにはわからない。

しかし、それを間近に見せつけられたオリティアは蒼白になった。ただ巨大なだけではない。胴部には小さな団栗のような鋳が螺旋状に植え込まれている。こんな凶器で肉壺をえぐられては……まさに拷問だ。

「あれ……このような」

片膝を高く持ち上げられて、オリティアの声が裏返った。金色の縮れ毛の中心で肉色の

割れ目が、ぱっくりと口を開いた。

「やめて……やめてください！」

懇願を無視してオリティアの身体は宙高く持ち上げられ、張形に串刺しにされた。

「ひいい……痛い」

しかし悲鳴は、すぐに終わった。乾いた肉壺に挿入される痛みは強かったが、体内に収まったあとは、圧迫感が残るだけだった。

オリティアの足が踏み台に下ろされて、足首の鉄環が踏み台の両端に固定された。膝の高さに円盤があるので、内股になって股間を隠すこともできない。もっとも、膝を曲げればそれだけ深く膣奥をえぐられるから、枷が許すかぎりつま先立ちにならざるをえないのだが。

首環が天井の滑車から垂れた太い鎖につながれた。長さに若干のゆとりを持たせてあるところを見ると、身体を吊るすのではなく、転倒をふせぐのが目的だろう。

「さすがに二人も子を産むと、乳も垂れますな」

ベリエの言葉は、つぎの責めの口実だった。35歳の公妃は女盛りに咲き誇り、たわわな

乳房はプディングのように盛り上がっている。

美しく整えて差し上げましょう。ベリエは道具箱から小さな金属の環を取り出した。Ωの形をしていて、環の中央には長い飾り鎖が、両端からは鈴が垂らされている。一見すると装身具。事実、装身具には違いなかった。

ベリエが踏み台に上がって。オリティアの乳房を揉みしだいて乳首を勃起させると、その根元に環を嵌めた。

「……………」

オリティアは無言で痛みと屈辱に耐えている。すくなくとも自分が嬲られているあいだは娘たちに魔手が及ばない——そう信じている。

「実は、同じ品があとひとつありましてな。これは……………」

芋虫のような指が豊かな繁みを搔き分けて、肉襞の頂点にひっそりと埋もれている肉蕾をつまみ出した。

「ひっ……………」

つるっと皮をめくられて、呑んだ息に悲鳴が混じった。

小さなΩ形の線細工が、剥き出しになった

肉芽の根元を挟んだ。

オリティアの眉間に苦悶の皺が寄った。ただ締め付けられるだけではない。小さな鈴のわずかな重みでも、敏感で繊細な肉芽にはじゅうぶんな拷問だった。

母が甚振られている様を見まいと、姉妹はひしと抱き合って目を閉じていた。たとえ肉親といえども肌と肌を、まして乳房を触れ合わせるなどはしたないという教えは、とっくに忘れていた。ことにリゼットのほうは——妹の秘唇に口づけたとき、意識して倫理の垣根を踏み越えている。

手を頭の後ろで拘束されて串刺しにされたオリティアの立ち姿は、滑稽で陰惨だが、ある種の性癖を持つ男には、このうえもなく素晴らしい塑像にも見えただろう。

しかし。ベリエの考案した責めは、ようやく準備がととのったに過ぎなかった。

「ニコラ、趣味に耽るのもたいがいにしておけ」

グスタフが長椅子から声をかけた。こんなふうには公妃を辱めているのは自分の本位ではない——そんな口ぶりだった。

「御意のままに」

ベリエに替わって、浅黒い肌の拷問吏が踏み台の横に立った。ミリアムを鞭打ったのは別の男だった。ふたりのうちでは、彼のほうがわずかに大きい。踏み台の上のオリティアよりも拳ひとつ高い位置に頭がくる。

拷問吏はその巨軀をかがめて、踏み台の脇から突き出ているハンドルを握った。男がハンドルをゆっくり廻し始めると。

「あ……え……！？」

オリティアの腰がくねり始めた。正確には――膝の高さにある円盤が回転して、円盤の縁に突き刺された張形に、オリティアの股間が引きずりまわされているのだった。

「あうう……」

張形には、先端が丸められているとはいえ金属の鉋が打ち込まれている。その突起に肉壺をえぐられる刺激からわずかでも逃れようとするなら、張形の動きに合わせてみずから腰を振らなければならない。

「……痛い。絡繰で女を弄んで、それが面白いのですか。ご自身で女を虐めることすらできないのですか？」

非難ではあるが、同時に挑発でもあると、オリティアはわきまえていた。欲望を放出すれば男はとたんに醒めるものだと、彼女は知っている。良人の寝物語は、きまって行為のあとだった。

この男たちの劣情が自分に向かえば——娘たちの純潔は守られる。

オリティアの挑発を、グスタフは嗤って聞き流したが。ベリエは顔をどす黒く染めた。

「遅いぞ。もっと早く。よがり狂うまで回してやれ」

たちまちに円盤の回転が速くなった。とうてい自分では動かせないほどに激しく、オリティアの腰がくねり始める。

シャラン、シャラン、シャララ、チャララ、チャララ……

三つの突起に吊るされた鈴が跳ね躍って、（母娘にとっては）耳障りな音を響かせる。

「あうっ、ひいい……」

苦悶にゆがむオリティアの顔。しかし——三、四十回も腰をくねらせるうちに。苦悶の奥から喜悅の色が立ちのぼってくる。

「くうう……あっ……あんっ……」

か細い呻きに苦しくも艶やかな響きが混じって、やがて。

「あっ、あっ、あああんっ……」

処女でさえも聞き間違えようのない喜悅の悲鳴。

「いやあっ……見ないで、聞かないでえっ……あああっ、ああっ！」

強い酒に混じられたさまざまな生薬。強烈な幻覚作用のある阿片さえも使われている。理性のタガをはずされ、官能を掻き立てられたところに、快楽の中樞をこねくりまわされては、性熟した女体に耐えられるはずもない。

たちまちのうちに、オリティアは肉体的快楽の坩堝と化していった。百回も腰を振った頃には。

「うああっ……ヴィー、赦して！　こんな、こんな、こんな……あああーっ！」

こんな野蛮人どもに嬲られるなんて屈辱のきわみ。

こんな浅ましい姿を見られるのは厭。

こんな快感は生まれて初めて。

そんなすべての意味をごった混ぜにして、オリティアは肉体的快楽の頂点と精神的拷問

のどん底とを、同時に味わっていた。

「あああっああっ……やめて、やめて、やめて……！」

中途半端に嗜虐癖のある男なら、ここでわざと回転を止めて、女の口から続きをねだらせようとするだろうが。ベリエには、そんな風雅はない。ひたすらに回転を続けさせ、生贄を快樂の頂点からさらに高みへと追い立てる。

「あああっ……もう、もう……」

オリティアはうつむけた頭を左右に振って、切迫を訴える。すでに足を踏ん張る力はなく、鎖で首を吊るされて、ようやく立っている。そのぶん、張形は肉壺を奥深くまでえぐっている。子袋まで貫いているかもしれない。

良人との営みでは到達したこともない絶頂をきわめて。さらに休む暇も与えられず、いっそうの高みへと追い上げられているとき。

「ミスリル銀は地上から失われた——書物には、そう書いてありました」

ベリエがオリティアの脇に近づくと、耳元にささやいた。

「……………」

オリティアの反応は、ない。

「では、どこに行ったのでしょうか。書付は燃やせば天に還るが、金属は溶けるだけです」

ぎくっと顔を上げたのは、檻の中のリゼットだった。

「もしや、アルキポスとともに埋葬されたのではありませんかな？」

正気づけるためか、ベリエは公妃の尻を平手で叩いた。

「ひぎっ……！」

打擲の痛みよりも、内側から張形を強く押しつけられた衝撃でオリティアは悲鳴をあげた。その衝撃が苦痛なのか快感なのか、彼女にはすでに定かではない。

「そうか。ミスリル銀は地上ではなく地下に有るのですな？」

ベリエは断定した。

「そ、そうかも……わらわには……あああつ……もう厭。止めて、止めてください！」

「ミスリル銀はアルキポスとともに埋葬された。そうですね？」

ベリエが拷問吏の肩を叩くと、円盤は逆回転を始めた。それまでは螺旋状に植えられた

鋌の運動で外へ引っ張り出す向きにえぐられていた肉壁が、奥へ押し込まれる。

「ああっ、あああ……お腹が、お腹が……」

「ミスリル銀はアルキポスとともに埋葬されたのですな？」

ベリエが執拗に耳元でささやく。それは誘導尋問でさえなく、洗脳だった。

オリティアは二度目の絶頂に達し、さらに追い詰められる中で、ついにベリエの言葉を認めた。

「そうです……きっと、そうです。ミスリル銀はアルキポスの墓所にあります……もう赦して！」

円盤の回転が止まった。オリティアは膝を折り、半ば首を吊られた姿勢で気を失った。張形で股間を支えられていなければ、窒息しただろう。

妹と抱き合ったまま、引き攣った顔で尋問の様子をうかがっているリゼットは、自分がグスタフに見つめられていることには気づかなかった。

6. 姉姫の肛虐

「夜も更けてきたことだ。わしも埒を明けて寝るとしよう」

グスタフが長椅子から身を起こした。そして、姉妹を閉じ込めた檻の前に立つ。

「わしの相手を務めてくれるのは、どちらだ？ おまえたちで決めろ」

てっきり、男たちがこのまま帰るものと思っていた姉妹は、抱き合ったまま凍りついた。目の前で母への凌辱を見せつけられていては、
● 3歳のミリアムですら、言葉の意味を正しく理解せざるをえない。

リゼットが、妹を押しつけて立ち上がった。「妹に手出しは許さぬ。辱めると言うなら、わたくしを好きなようにするがよい」

声も膝も震えていた。

許してもらおうとは思わぬが——グスタフは薄く嗤いながら、リゼットの首環から鎖をはずした。

「隣の寝台でかわいがってやろう」

グスタフに従って檻を出て、隣の檻へ移る。

ある意味、鎖に引きずられるよりも屈辱だった。みずからの意思で足で、凌辱の褥へ歩まなければならないのだから。

「では陛下、お愉しみを」

ベリエが檻の扉を閉じた。銀メッキの金属板を磨きあげた、それ。月明かりの中でも、くっきりとリゼットの裸身を映し出している。姿見の中でグスタフは、ただ寝るだけなら母娘三人でも広すぎるほどの寝台に腰掛けて、衣服を脱ぎはじめていた。

手招きされて、リゼットはぎくしゃくと寝台に近づいた。

「犬の格好をしろ」

四つん這いにさせるのに、わざと乙女を辱める言い方をするグスタフ。

リゼットとて、野犬の交尾くらいは目撃したことがある。その光景を思い出して身震いした。けれど、妹を人質に取られているも同然とあっては、凌辱を受け入れる姿勢にならざるをえない。リゼットは膝を屈して寝台に両手をついた。

「そうではない。肘をついて脚を伸ばせ。もっと尻を上げるのだ」

リゼットは屈辱に悶えながら、尻を突き出した。敷布に、ぱたぱたと涙がこぼれてにじむ。

「ニコラ、脂はあるか？」

「は……？ ああ、そうでした」

ベリエがひとり合点すると、道具箱から掌ほどの壘を取り出して、檻にはいつてきた。

「馬の脂に媚薬を練り込んだ極上品でございます」

媚薬をわざわざ強調したのは、リゼットに聞かせるためだろう。

「きゃ……」

予期していなかった部位をひんやりした感触に襲われて、リゼットはうろたえた悲鳴をあげた。

「なにをする！ そ、そこは……」

排泄の孔に脂を塗り込める指の動きは止まらない。どころか、グスタフは片手でリゼットの尻をかかえて、逃れようとする動きを封じた。脂を肛門の表面に塗るだけでなく、指で穿って中まで塗り込めた。

「つうう……やめろ」

「おまえは生娘のままで本国に連れ帰る。息

子の子供を産んでもらわねばならんからな」

寛容なわしでも、息子か孫かわからぬ赤子は持て余すと、グスタフがうそぶく。

「それは、どういう……？」

敵国の男の子を孕んだ自分を想像して、リゼットはおののいた。

「どこの国でも、女に王位継承権は認められておらぬ。しかし、王女が産んだ男児となると話が別だ。この国でも、そういう決まりになっておるな」

質問ではなく、あらかじめ調べてある事実の確認だった。

「わしに次男でもおれば、おまえと娶せてもよいのだが」

グスタフには子供がひとりしかいない。まさか、王太子に他国へ婿入りさせられるはずもない。

「ふん。だいぶにこなれてきたな」

グスタフはひとりつぶやくと脂の壘を脇に置き、リゼットの尻に向かい合って膝立ちになった。

「口を大きく開けて、深呼吸をしている。間違っても、いきんだりすぼめたりはするなよ」

「貴様の指図など受けぬ」

屈辱的な命令には従っているのだから、リゼットの言葉は矛盾しているのだが、本人はそれに気づいていない。

「わしは親切心で言っておるのだ。つらい目に遭うのは、おまえだぞ」

ひどく優しい物言いだった。騙されるものかと思いながら、リゼットはグスタフの指図を受け容れた。

「いくぞ……」

めりめりと孔を引き裂かれるような劇痛。
いや、灼熱感。

「うああっ……やめて！ 赦して……！」

まさか願いを聞いてもらえるとは思っていなかったリゼットだが。ふっと圧迫が消えた。

「処女騎士団などといきがっておるが、他愛もない小娘だな。戦場で怪我でもすれば、大声で泣き叫ぶことだろうて」

そんなふうに侮蔑されては、意地でも耐えてみせなければならない。リゼットは全身から力を抜いて口を大きく開け、ゆっくりと息を吸って吐いた。

リゼットが顔を上げていれば、姿見の中で

グスタフが薄く嗤うのを見ただろう。中央世界の西端に位置する大国から先王の姪を妻に迎え、彼女をも調教した男にとって、小娘を手玉に取るなど雑作もないことだった。

「いい子だ。そのまま楽にしておれ」

ふたたび怒張を排泄孔にあてがうと、グスタフは一気に腰を進めた。

「ぎゃはあっ……！」

しかし、悲鳴はすぐに消えた。激痛は一瞬だけで、あとは引き攣れるような感覚と、その奥にある鈍い疼きと、腹の奥にずしんと居座る違和感。けっして泣き叫ぶほどの苦痛ではなかった。それでも。穴を貫く肉棒が前後に抽挿を始めて、リゼットの身体を前後に揺すり始めると、灼熱感が甦ってきた。

「ひいい……うっ、うっ、うっ……」

突かれるごとに、リゼットは短く呻いた。

しかし、その責め苦もすぐに中断された。

「わしだけが愉しんでいては可哀想だ。おまえにも悦びを与えてやろう」

グスタフの上体がリゼットの背中におおいかぶさってきて。

「ひぐっ……！？」

秘部の頂点を不意につままれて、リゼットは裏返った悲鳴をあげた。母が三つ目の装身具を着けられた箇所だった。

実核をつつむ小さな皮が、やわらかく前後にしごかれると。

「え……いや、やめて」

これまでに経験したことのない、甘くてくすぐったいさざ波のような感覚が、腰の奥まで突き抜ける。

「心にもないことを言うな。もっとしてほしいのだろう？」

「くうう……」

鼻にかかった呻き声が、リゼットの返事だった。

さざ波はだんだん強く大きくなって全身に広がり、肛門の痛みさえも覆いつくす。いや、痛みは痛みのままで、それがくすぐったさに変わってゆく。

くすぐったいといしか形容を知らないリゼットだが。その感覚こそ、性の快楽だった。

いつかりゼットは、快楽の波に揺れるように、みずから腰をくねらせ始めていた。

そうして。つるんと包皮が剥かれて、すっ

かり充血した肉芽を、グスタフの指に密生している黒い毛で逆撫でされると。

「ひゃああっ……んん」

リゼットは背中をのけぞらせて叫び、がくつと崩折れた。

その、快樂の余韻に酔っている乙女の尻を抱え上げると、グスタフは今度こそ本気の抽挿を開始した。そして、じきに。

「うおっ……」

短い吠え声とともに、リゼットの腸内に白濁をぶちまけた。

「きれいな水を持ってこい」

鞭打ち役の拷問吏が、すっ飛ぶように階段を下りて、すぐに大きな桶を持って戻ってきた。近くに井戸はないのだから、前もって用意してあったのだろう。

「いずれは、おまえの口で清めさせてやるが、最初からではかわいそうだ」

グスタフは、まだ萎えていない怒張を抜去すると、床にしゃがんで股間を洗った。

人心地を取り戻したリゼットは、寝台に突っ伏したまま男の後ろ姿を睨んでいる。父を謀殺し、今また自分の純潔を踏みにじった男。

ふつうの意味では犯されなかったとはいえ、純潔を奪われたのは同じだ。いや、もっと悪い。

ふつうの意味で純潔を奪われ、この男の息子の子供を孕ませられるときも、今とおなじような不本意で屈辱に満ちた肉の交わりになるのだろうが……

「あっ……！」

リゼットは大声をあげた。

「なんだ？」

グスタフが振り返る。

「息子はひとり。わたくしと娶せることはできぬと、貴様は言ったぞ」

なんだ、そんなことかと——グスタフはせせら嗤った。

「野合でも子はできるものだ」

不義の子、私生児、神の祝福を受けられぬ赤子——さまざまな言葉が、リゼットの頭をかすめた。

「そのような子に、公位継承権が認められるはずがないではないか」

グスタフの嗤いが、満面に広がった。

「実の兄妹がなした子を先祖に持つおまえが、

それを言うのか？」

あっと、リゼットが絶句する。思わず妹を振り返る。彼女は、母も姉も目にはいないよう、嬌声も聞こえないよう、両手で耳をふさいでうずくまっていた。

「教会はこのことを知っておるが故に、歴代のレナール公を王と認めなかったというのは、ニコラの推測だが――そう的外れでもあるまい」

ならば、私生児くらいで文句を言われる筋合いはないと、グスタフがうそぶいた。

レナール公国をクローブ王国の直轄領とするのはたやすい。しかし、そうすれば、周辺諸国といらぬ軋轢を生む。傀儡であろうとも、正当な後継者を立てるのが上策だ。

そうすれば、統治も楽だ。圧政への怨嗟はグスタフにではなく、幼いレナール公と、その摂政たるリゼットに向けられる。民衆の反乱など歯牙にも掛けぬが、叛乱にそなえて多数の兵を常駐させるのはもったいない。

そしてグスタフにとっては、直轄領か傀儡国家かという二者択一の問題ではないのだった。ミスリル銀の供給を約したがゆえに、レ

ナール公領は自治を許されたと喧伝する。そして、神秘の武具を手に入れたクローブ王国は、またたくうちに、中央世界に覇を唱える。それが、国庫を空にするほどの大遠征を、あえてグスタフに選ばせた真の理由だった。

グスタフの計略でもっとも困難な点は、私生児への公位継承を教会に認めさせることだった。すくなくとも中央世界では、教会は絶対の権威を持っている。いざとなれば買収と恫喝も辞さぬつもりだったが。それが、レナール公列伝のおかげで不要になったのだ。

グスタフは、身づくろいを終えて立ち上がった。

母と姉とを牢へつながせると彼は、すでに拓かれている霸王への道を、威風堂々と歩み去った。

オリティアとリゼットは股間の汚れもそのままに、失意の夜をすごさねばならなかった。

7. 姉姫の屈服

それから三日。一日に二度の食事と排泄の時を除いて、母娘は牢獄に放置されていた。檻の中を歩きまわることさえ許されぬ鎖にも、手づかみの食事にも、男どもの好奇と好色の視線に晒されながらの排泄にも、すでに母娘は馴らされていた。

しかし、陰惨な時が静かに流れたのではない。塔の外が、ひどく賑やかになってきた。林の樹木が切り倒される音が朝から晩まで続き、なにやら土木工事も始まったらしかった。ときおり塔まで聞こえてくる人夫たちの呼び交わす声には、クローブ王国の訛りだけではなく、この地方の庶民の言葉も交じっていた。

いったいなにが起きているのか、なにを作ろうとしているのか。たずねても、ベリエは無論、いつも二人組と決まっている兵士たちも答えない。会話を禁じられているらしい。

グスタフの企みを阻止する力など母娘にはない。ただ、リゼットとしては。幼い頃に遊んだ裏庭の林が消えようとしていることが、

ひどく悲しかった。

——そうして、四日目。監禁されてからは八回目の夕刻遅く。

「アルキポスの墓地は、どこにある」

例によってベリエとふたりの拷問吏を従えたグスタフが、短兵急にリゼットを尋問した。

「誰も知らないのだ」

リゼットはできるだけ平静な声で答えた。いずれ、この質問が発せられることはわかってきっていた。それでも、声が震えないようにするには努力がいった。

「レナール公列伝のどこにも、そのことは書かれていない」

「この街の中だけではない。残る二つの都市も、五つの村も、すべて探させた。どこかの山奥にでも隠してあるのか？」

かすかにではあったが、リゼットはあざけりの笑みを浮かべた。グスタフは、それを見逃さなかった。

「やはり、おまえは知っておるな」

「まさか。わたくしは墓荒しの真似事などしたことはない」

グスタフの問いへの答えにしては、行為が

具体的に過ぎた。そうでなくても、母娘の会話はベリエに盗聴されている。リゼットが何事かを隠しているらしいと疑ったのは、母親だけではない。

「それでは、やむを得ぬな。まことに忍びないのだが……」

グスタフの言葉と表情とは食い違っていた。「いつぞやは、自分を拷問に掛けてほしいと申しておったな。その望み、存分にかなえてやろう」

拷問吏が牢にはいつてくる。

「お願いですから、やめてください。ミスリル銀の錬金法はご自分で見つけるとおっしゃったではありませんか」

オリティアは娘を抱いてかばった。

「無駄です。わたくしが息絶えたとき、この男は、言葉が真実だったと思い知るでしょう」

リゼットは母の腕を振りほどいた。自分が殺されることで、ミスリル銀の秘密を守り抜ける――レナール公の後継者にして処女騎士団長の乙女は、心をはげまして拷問吏の前に立った。

「どんな厳しい拷問にも、わたくしは耐えて

みせる」

その言葉自体が、秘密を隠していると白状したも同然なのだが、拷問への恐怖に立ち向かおうとしているリゼットは気づかなかった。

「最初に断わっておくが……」

グスタフは残忍に、そして楽しそうに言う。

「おまえを拷問で殺したりはせぬ。レナール公の母親になってもらわねばならぬからな」

リゼットは牢から引き出され、母親がされたと同じように、頭の後ろで重ねた手首と首環とをボルトでつながれた。歳のわりには淡い叢に見合って、腋の下も肌の大半が露出している。

「おまえは見事に裸馬を乗りこなしていたな」

三組の処女騎士と従者たちが素裸に剥かれて連行されたときのことを言っている。

「木馬も同じように乗りこなせるか、処女騎士殿のお手並みを拝見しよう」

三角柱を脚で水平に支えた拷問道具が、広間の中央に据えられた。

三角木馬が、ことに女人にとって如何に残酷な責めであるか、リゼットは知らない。け

れど、生易しい拷問ではないと、それは覚悟している。

今度は俺の番だというわけでもあるまいが。オリティアが責められているあいだは手持ち無沙汰にしていたほうの拷問吏が、リゼットを背後から抱え上げた。両手で太腿を割って、女兒におしっこをさせるような姿で、木馬の上に運んだ。

すたとんと、リゼットは無雑作に木馬の上に乗せられた。

「ぎひいっ……！」

想像していた何十倍もの激痛に、リゼットは叫んだ。股間に楔を打ち込まれて、まっふたつにされたような、鋭い痛みだった。

「うああ……」

激痛に身悶えすると、ますます痛みが激しくなる。会陰部の痛みから逃れようとして身体を前に倒すと、秘裂の奥にある肉壁が切り裂かれる。

転げ落ちないようにと、リゼットの首環も天井の鎖につながれたが、母よりもさらに緩くされたので、わずかでも体重を支える役には立たない。

「ぎいいい……くそう、負けるものか。知らぬことは白状のしようがない」

歯を食いしばって激痛に耐えるリゼット。見る見るうちに、全身が脂汗にまみれてゆく。

か細い鳴き声が、リゼットの耳に届いた。「お姉様、かわいそう。母様、なんとか……してあげられないの？」

泣きながら、母に訴えるミリアム。

オリティアは小さな娘を抱きしめるよりほかに、なすすべを知らない。

「この馬は、まったく走らぬな」

グスタフが壁から乗馬鞭を手にとった。いや、乗馬鞭に似ているが、もっと長く、先端の平たい部分には金属の鋏が打たれている。

「そうれ、ハイホー」

掛け声とともに、木馬ではなく乗っている者の尻を叩いた。

「いぎゃあっ……！」

しゃがれた吠え声が、清楚な乙女の喉からほとばしった。叩かれた痛みは知れていたが、反射的に腰を引いた動きで、木馬の稜線が秘裂の奥深くを切り裂いたのだ。

つううっと、赤い筋がリゼットの太腿をつ

たった。リゼットのまなじりに涙が浮かんだ。それでも、取り乱して慈悲を乞ったりはしない。

二発、三発と、グスタフは鞭を振るった。尻だけでなく、乳房にも鞭が飛ぶ。

「がはあっ……！」

リゼットはのけぞり、今度は肛門に近いあたりを木馬にえぐられた。

「ひいい……くううう」

鞭打たれない合間にも、リゼットの呻きは苦悶の深みを増してゆく。最初のうちは、裸馬に乗る要領で木馬の腹を太腿で締めつけていた。それもできなくなって、彼女の全体重が股間を割る鋭利な稜線に掛かってきたのだ。

「陛下、あまりひどくなさると、股が裂けてしまいますぞ」

ベリエが含み嗤いしながら、忠言する。

「ふん、女の股は元より裂けておるわ」

ぐふふと、拷問吏が追従笑いをもらす。

「いや、すこしくらい裂けたほうが、子を産むときに楽なのではないか？」

あるいは言葉で勸めているつもりかもしれないが、リゼットの耳にははいっていない。

半時間ほども拷問は続けられたが、気丈にもリゼットは失神することなく耐え抜いた。

「これでは、埒が明かぬな。下の娘にも手伝わせるか」

「肌も綺麗になったことですし。もう二、三十本ばかり飾りを増やしてやるのも一興ですな」

綺麗になったどころか。鞭傷はようやくかさぶたが剥がれて、新しい肉が盛り上がってきたところだ。ミリアムの身体には、生々しい傷跡が残っている。

「やめて！ この子に罪はありません」

「やめろ！ また妹に手を出したら、死んでやるぞ！」

母と姉とが、同時に叫んだ。

リゼットにしてみれば、現在の自分にできる最大限の脅迫だった。ミスリル銀の秘密は葬られるだろうし、傀儡にされる赤子も生まれない。どちらもグスタフには痛手のはずだ。

「うるわしき肉親の愛情だな。それに免じて、小娘を痛めつけるのはやめておこう」

代わりに母親を責めろと、グスタフは命じた。

「母様を虐めないで！」

取りすぎるミリアムを蹴り転がして、拷問吏がオリティアを引きずり出す。

「先日は、たっぷり楽しませてやったが、今日はつらいぞ」

部屋の一画にしつらえられた垂直の大きな車輪に、オリティアは、かつて娘が磔にされたと同じ姿――腕を水平に伸ばして開脚した、女として屈辱きわまりない姿で縛りつけられた。頭は車輪の縁に達している。

拷問吏が二人して姿を消し、なかなか戻ってこない。そのあいだ、リゼットは鞭打たれることもなく、三角木馬の上に放置されていた。

ほんとうに、この男にミスリル銀を渡すと中央世界が減びるのだろうか。ふっと、弱気が頭をもたげた。

ただひと振りの剣。かりに百人を斃せるとしても、たとえばクローブ軍の五千にはかなうまい。ミスリル銀の錬金法が解明されたところで、鉄の何百倍、いや何千倍もの手間と費用がかかるのだから、実用にはなるまい。百人の兵をミスリル銀で武装させるには、十

万人分の軍事費が必要なのだ。いかにクローブ王国とて、それだけの経済力はあるまい。

たとえミスリル銀の秘密を明かしても大事ない——そんなふうに考えてしまうまでに、リゼットは追い詰められていた。

四分の一時間ほどもして戻ってきた拷問吏たちは、綱を使って大きな桶をいくつも運び上げた。桶の水を、車輪の下の細長い飼葉桶に張る。

水車責めとベリエが言っていたのを思い出したが、まだリゼットにはどのような拷問がよくわからない。

ギイイイ……拷問吏が水車の縁をつかんで、ゆっくりと回し始めた。

オリティアの裸身が上下逆さになって、頭が水の中に没する。さらに回りつづけて、オリティアの頭が水の上に出たとき。彼女は激しくむせていた。

顔を洗っているとき、うっかり鼻から水を吸い込んだりすると同じようになる。そんなふうにしか考えられないリゼットだったが。

つぎに母の頭が水中に没したところで、水車が止まった。

(え……？)

水車が壊れたのではない。わざと止めているのだ。

逆さ磔にされた母の身体が、わずかにくねっている。と、見るうちに。

ゴボボッと水面に泡がはじけた。息を止めていられなくなったのだと、それはリゼットにもわかる。

水車は、まだ止まったまま。息を吐けば、つぎは吸う。

(あ……！！)

ようやく、リゼットは責めの恐ろしさを理解した。溺れ死んだ人間を見たことはない。しかし、話には聞いている。

「水車を回せ。母を殺すつもりか！？」

股間の激痛も忘れてリゼットは叫んだが、グスタフも拷問吏も知らぬ顔。

じきに、さっきよりも激しく水面が泡立った。拷問吏がグスタフに向かって首を横に振る。

「戻せ」

ゆっくりと水車が回って、オリティアの頭が水面から現われた。

オリティアは激しく咳き込む。咳とともに水が吐き出される。

「げほっ……げええ、ひゅうう……」

濡れて顔にへばりついた髪が口にはいるのもかまわず、喉を鳴らして息をむさぼるオリティア。

「回せ」

グスタフの非情な命令。

ギイイイイ……みたび、オリティアの身体が上下逆さになってゆく。

すこしでも長く息を止めていられるよう、オリティアは咳をこらえて大きく息を吸った。泡の吐き方で限界を見究められているとは知らない。

水車はオリティアを逆さに縛りつけたまま、ぴたりと止まった。

「そのままにして、下がれ」

主人の命を受けて、拷問吏は水車に楔をかけて回らないようにしてから、身を引いた。

その恐ろしい意思表示に、リゼットはおののき、絶望した。

小さな泡が連続して水面に浮かび……またしてもゴボッと大きな泡がはじけたとき。

「母を助けてくれ！ 教える、教えるから！」

ついにリゼットは屈服した。

「アルキポスの墓所は、どこにある？ ミスリル銀も、そこにあるのか？」

「女子修道院だ。ミスリル銀も、錬金法も、なにもかも、そこにある！」

泡は断続的に浮かんでいる。いつ、それが止まるかと、リゼットは気が気でない。

「女子修道院だと？ 世迷言もたいがいにしる」

「嘘ではない。アルキポスは……女なのだ！」

当人が名乗ったのか列伝の執筆者がおもんぱかったのか。本名がアルキポサかアルキポセア、それともまったく別の名かは知らない。正史に女性の名が記されるのを忌避したのだろう。

当時は、女性が男と張り合うのをこころよく思わない者が今よりも多かったのだろう。

「……回せ」

拷問吏が悠然と歩み寄って楔を抜き、それでも腕にすこしだけ筋肉を盛り上げて水車を回した。

オリティアが咳き込み水を吐き出す様子を

見て、拷問吏がうなずいた。生命に別条ないという意味だとは、リゼットにもわかった。

「水車を回されたくなければ、もっと詳しく説明しろ」

グスタフは鞭でリゼットの尻を軽く叩いた。

敗北感にうちのめされて肉体の痛みに鈍くなっているのか、リゼットはかすかに背中を震わせただけだった。

「あの章を読んだ最初から、アルキポスがズボンの着用を禁ぜられたという記述を不思議に思っていた……」

疲れた声で、しかし道筋立てて、リゼットは真相を語り始めた。

ミスリル処女騎士に叙任されて、真っ白な乗馬スカートに初めて足をとおしたとき、天啓があった。異性の服装をすることは、厳しく禁じられている。それゆえに、一部の女性はズボンを穿いてみたいという願望を秘めている。

ミスリル騎士団員が、すくなくとも純白に身を固めているときは男言葉を使うのも、それに似た心理がひそんでいるのかもしれない。

そしてまた。魔法使いといわれれば女を連

想するように、錬金術師は男の職業だ。

アルキポスに男装願望があったのか、錬金術師として認められたい野望からかは知らないが、アルキポスは男装でレナール公に謁見したのではないだろうか。

そう考えれば、列伝の不可解な記述も、すべて辻褃が合う。

厳格派とは、通俗に流れず神の教えを遵守する教派である。アルキポスの男装を異端と考えるだろう。だからアルキポスは、ただ殺されたのではない。男たちに辱められてから殺されたのだ。

列伝の中に、アルキポスを代名詞で記述した文章はない。列伝の執筆者は「彼女」と書きたくなかったのだろう。しかし「彼」と書けば嘘になる。

もうひとつ、これは列伝の第十九巻にある記述。

アルキポスの没後百年。アルキポスの横死を悼んで、ミスリル処女騎士団が結成さる。

ミスリルはわかる。しかし、なぜ処女騎士なのか。か弱い女でも扱える神秘の武具であることを強調して、あえて世界に類例のない

騎士団を創成したといわれているが。

アルキポスの終生の願いが、男のように振る舞うことであったとしたら。処女騎士団こそ、彼女の願いを具現したものではないだろうか。

リゼットは、憑かれたようにしゃべりつづけた。

アルキポスの墓所を見つけ、ミスリル銀の剣を見つけ、その錬金法まで見つけて。さすがに嚴重な人払いを求める分別はあったが。勢い込んで父に報告して、ひどく叱られた。考えに考え抜いた推論の過程を披歴するいとまもなかった。

その鬱屈が、もっともミスリル銀を渡してはならぬ男に向かって吐き出されているとは、皮肉というよりも憐れであった。

「ミスリル銀は、人の心の中にのみ存在しなければならぬ」

父ヴィクトールは、娘を諭した。そのときは意味がわからなかった。今となれば明白だが、しかし父の、いやレナール公国の方針は、中央世界でのみ通用するものだった。

幻の武具の威力を最大限に見積もって、三

十騎の騎士と二百人ばかりの傭兵を主戦力とする国を侵攻するために五千の軍勢を結集し、あまつさえ正面衝突を避けて卑劣な手段に徹する凶悪な王が出現するなど、想像の埒外だった。

「おまえの言葉が真実とわかるまで、母親はそのままにしておく」

グスタフの言葉が、リゼットの想念を拷問の場に引き戻した。

「嘘いつわりであったなら、水車はあと半回転だけして、そこで永久に止まる」

リゼットは、弱々しく首を横に振っただけだった。

リゼットは三角木馬から降ろされ、妹と並んで鎖につながれた。

「だいじょうぶ、ちょっと切れたただけだから」

自分への手当てを夢うつつに覚えていたものか、傷を舐めて清めようとするミリアム。それを、リゼットは頑なに拒んだ。